

層富

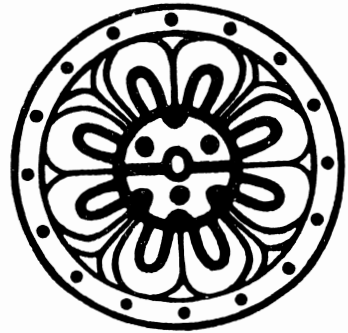
(川口勇書)

会誌名「層富」(そは・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



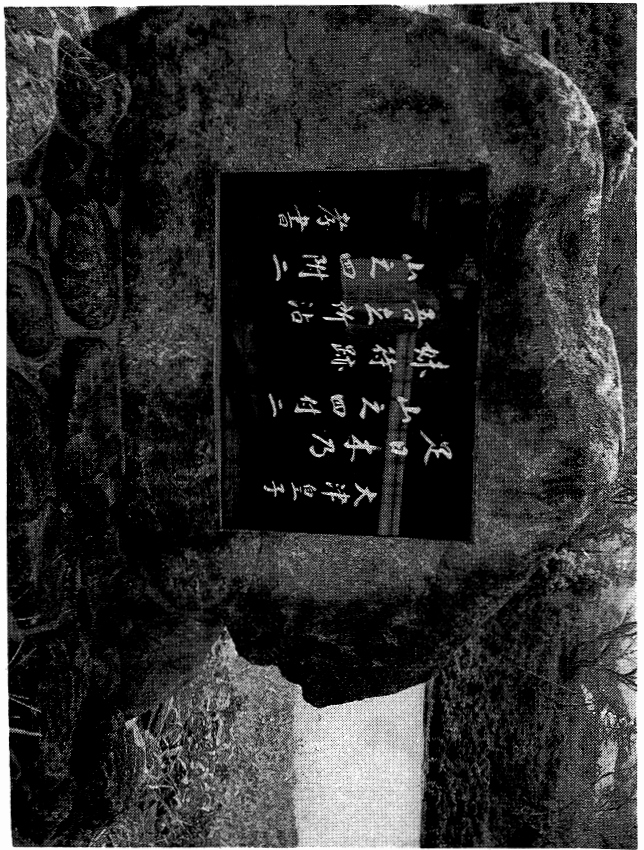
会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)

第十五号 目次 一九八年

巻頭言	網千 善教	1
記念講演		
キトラ古墳と高松塚古墳の壁画	網千 善教	2
随想 父の日	木村 長子	5
月とスッポン	廣田 好實	7
ミョウガのふる里	光岡 祐彦	9
漢詩	片桐 一夫	12
短歌		13
俳句		22
グループからの便り		28
第十五回文化祭記録		75
一九八年度総会記録		79
会則		86
役員名簿		89
会員名簿		1
編集後記		



はじめに

会長 網 干 善 教

新聞やテレビで報道されるところ、現在の世界経済は新たな再編成を強いられ、日本経済はなかなか回復しないし、明るい見通しは今しばらくはむつかしいといわれています。

一方、日本の社会では著しい高齢化がすすんでいます。私たちの周辺をみましてもそのことを感じます。平城ニュータウンでも同じでしょう。そうしたなかでの地域活動は老若男女、すなわち多くの人が集って、それを組織的に運営することが肝要かと思えます。

人、それぞれ考え方や趣味、興味が違います。私たちの文化協会はたとえ数人の集りであっても、集ってきて共に活動することが大切であり、それを基本と考えています。むつかしい規約の適合は必要でないのです。ただルールはみんなが自発的に守ることが大切です。

個人では甚だやりにくいことを皆さんでやってゆく。その核となるのが私たちの会なのです。みなさんの積極的な参加をお待ちしています。

第十五回総会記念講演

キトラ古墳と高松塚古墳の壁画

網 干 善 教

平成十年三月五日と六日に、奈良県明日香村のキトラ古墳で、超小型カメラによる石槨内の二回目の探査がありました。その結果、前回の昭和五十八年のファイバースコープ探査で確認してました北壁の玄武図に加えて、新しく東壁の青竜図と西壁の白虎図、天井の星宿図が見つかりました。さらに、東西両壁の上の天井石を斜めに割り込んだ中央あたりに、東に日像、西に月像があるらしいといわれていますが、定かではありません。

だが、高松塚古墳のような人物像は描かれていませんでした。なぜなのだろうか。その意味は判然としませんが、風俗画的な人物図は、壁画の主題である星宿や四神図と、思想的な背景が異なりますから、描かれていなくても別段、不思議ではないのです。

人物像の有無はともかく、キトラ古墳の壁画と高松塚古墳の壁画を比較すると、いくつかの相違点があります。まず、天井の星宿図であります。キトラ古墳で映し出された映像には、朱線で繋いだ星宿らしいものが見えます。その位置は石槨のほぼ中央部です。そして、大きな円形が四重にあります。その中の二つの円は交差しています。いうまでもなく赤道と黄道と見られます。ただし、赤道、黄道を明かにするためには、星宿の形状や位置などを正確に知る必要があります。外側の大きな円は外規、あるいは外周、一番内側の小さな円は、紫微垣を囲む内規あるいは内周といえます。

外規や内規あるいは星宿を描いた例は、中国では南宗淳祐天文図・呉越国王・錢元瓘や王妃・呉漢月の墓・北

朝鮮の開城市郊外の高麗国第二十代神宗陽陵の天井図にあります。しかし、これらの赤道、黄道、星宿を描いた天文図は、いずれもキトラ古墳より後の時代のものです。高松塚古墳には紫微垣と二十八宿の星座はありますが、赤道や黄道は描かれていません。またキトラ古墳には、多数の星のようなものがあるといわれていますが、明確ではなさそうです。中国・西安市郊外の乾陵陪塚・永泰公主墓の天井にも、一面に星が描かれています。報告書にその図面がないので比較できません。

もともと、古墳における星宿図は、分野思想を反映したものであります。分野思想とは「古代中国で、全土を天の二十八宿（紫微垣を中心とした星宿）に配して、各地域を司る星宿を定めた天上の区分」（広辞苑）を意味します。

キトラ古墳の天井中央に星宿図が描かれていることは、キトラ古墳と高松塚古墳の壁画は、思想的に同じ意味を持つていることを示しています。そこで知りたいのは、描かれている二十八宿の正確な形状と位置、そして紫微垣に相当する星が描かれているのかどうか、ということでありま

次に四神図であります。東壁の青竜図は、姿全体ははっきりしないものの、赤色の舌のようなものがあり、それが青竜とみなされています。問題は、西壁の白虎図であります。白色の漆喰の壁に白虎を描く場合、高松塚古墳では、一部を除いて黒色の線だけで虎の形や虎斑を表現していました。映像を見ると、キトラ古墳の虎斑は少し違うようにみえます。さらに白虎の向きが反対の北向きであることも大きな相違点であります。

そもそも、白虎図は二十八宿のうち西方七宿の星の位置を連ねて形象化して想定されたものであります。従って頭部は南向きが原則であります。なぜ、キトラ古墳では裏書きのような図形になったのだろうか。かつて長広敏雄氏が中国唐代になると、「四神の精神が衰えてしまふことがある」と述べたようなことによるのかも知れません。

白虎が北（玄武側）に向く例は、正倉院宝物の十二支八卦背円鏡の四神図に見られます。この鏡は十二支や四神が同じ方向に向いている走獣像でありまして、キトラ古墳の場合の白虎と玄武が対峙した形とは異っています。北方七宿から生じる玄武図は、前回の探査でも分かっ

ているように、亀に蛇が絡んだ図であります。高松塚古墳の場合、玄武図の中央が盗掘の際に刃物のようなもので削り取られていたことから、全体の形に不明確な点はありませんが、キトラ古墳の場合は、欠けた部分がほとんどなくてよくわかります。玄武図の研究には優れた資料となるでしょう。

昭和四十七年に発掘しました高松塚古墳の石槨内に、極彩色の星宿、日・月、四神図と、男女の群像が描かれていましたことについて、当時、こうした高度な思想を表現する古墳壁画は高松塚古墳だけなのか、という疑問がありました。

そのため昭和五十四年に同じ明日香村の桜隈地域にあり、ほぼ同時代のマルコ山古墳を発掘調査しました。しかし、この古墳に、壁画は描かれていませんでした。そこで昭和五十八年、キトラ古墳を探索し、玄武図が描かれていることを確認しました。今回、四神の壁画や星宿の天井画が見つかりましたことによって、高松塚古墳が「孤高の墓」ではないことが分かり、この時代の古墳研究を一步進めることになったのです。

問題は壁画のないマルコ山との相違であります。また、

キトラ古墳と高松塚古墳は、ともに壁画が描かれていたという共通性がありますが、大きな相違点もあります。どのような点が違い、なぜ違うのか、という課題を究めるための学術的検討が迫られているのです。



父の日

木村長子

去年の「層富」には「母の日」という拙文を書いた。

今年はまだ遠慮しておこうと思っていたのだが、松岡先生ら枯木も山の賑わいとすめられて、何となくその気になりはしたものの、私の例の「つれづれ帖」にもこれと言ったものはなく、どうしたものかと考えあぐねて、そうだ一つ「父の日」を一夜漬けでと、そんな気持ちになつたところである。

× × ×

いつ頃からか、「父の日」は六月の第三日曜日とある。

戦前には「父の日」はなかったように覚えてゐる。「母の日」は早くから定着しているのに随分と片手落ちだ。

それも「母の日」の宣伝に比べると大分に影がうすい。

しかし、大方の父親たちは「父の日」なんて歯牙にもかけていないのではないか、これも又、商魂のなせる業なのだから。

私の父は正に封建時代の長男としての生まれ合わせのために、義務ばかりを背負わされて不遇の中に昭和三十一年の寒い日に七十三歳で歿した。

青雲の志を抱いて大陸に雄飛し自ら築いた社会的地位もただ長兄という足枷のためにすべてを放棄し、帰国してからは両親、八人もの兄弟姉妹のために何かと犠牲を強いられた苦難の人生であつた。

小都市であるF市に帰つてからはどうか裁判所の書記官という職につき、定年後はそれでもまだ隠居にはなれず、司法書士という看板を掲げてはいたが、一徹者の父は時折り履歴書を書いてほしいという客には、「履歴書なんてものは自分で書くものです」とにべもなく、複雑な登記手続きの作成では客が差出すいくばくかの謝礼を料金外だと頑なに拒否する明治人間であつた。

こんな調子だったので必ずしも事務所は隆盛ではなかつ

だが泰然自若としていたそんな父が私は好きであった。日曜日の朝には放送される政治放談というラジオ番組を唯一の楽しみとして聴き入っていた父。まだテレビの普及していなかった頃とて致し方もなかったが、今少し長生きさせて、せめて視覚によるこの楽しみを味わわせてやりたかったと娘としては悔まれてならない。

又、父は豊かな声量の持主で謡曲も自在に嗜み、正月にはその音声でカルタ会での読み手を常に引き受け、また取り手としても一流であった。

私はこんな父が母よりも好きであったが、しかし父が亡くなってすでに久しいが、その間私は一度もその意を伝えるようなことも出来ずに終ってしまった。それどころか、世間の何たるかも知らずに若くして勝手に結婚し、そしてすぐに寡婦となってしまうた親不孝者を、一言の繰り言もなく再び迎え入れてくれた父、私は深い悔恨の涙の中で大きな父性の断面を見せつけられた思いであった。

そして、こんな父性の前には「父の日」の響きも何か空虚で稀薄なものに思えてくるのである。

今年、六月二十一日は「父の日」と聞く。

父の日の父の墓所なるさざれ石

長子

—平成10年5月24日脱稿—



『月とスッポン』

廣田好實

くらいついたら最後、雷鳴が轟いても離れない——はスッポンの特技。現認してはいないが古来からの言い伝えだから間違いあるまい。

かつて事件記者だった時代、こちらもそう呼ばれた。

一度狙った獲物は、めったなことには逃さなかった。猛者ぞろいの刑事たちからも煙たがられた。

いま、昔日の面影ゼロ。咀嚼をつかさどるあごの力は失せ、歯はガクガク。離さないどころか、食いちぎるのさえ至難の業。

そんな調子だから日常の食事も軟らかいものを好む。咬む必要のないアルコール類は、なお好む。スッポンの首は長い。長い分だけコクツ、コクツとのどもとを通過する味がたまらない。古今『酒とスッポン』の因果に触れた文がないのは、なぜだろうか。

『月と鼈』の格言は知っている。どちらも丸い。が、

位置する場所は天と地。《二つのものの中に、非常に差のあることの例え》と記憶する。

いま、こちらが月と仰ぐのは網干善教会会長。二人とも昭和二年（一九二七）の生まれである。網干さんはご承知のように頭脳明晰、行動力・脚力抜群、労をいとわない。中学在校中に皇統史観の虚を見抜き、実証のために考古学を専攻して学会の頂点に立つ第一人者。

対して片方は思慮浅く、戦時中は〃万世一系の皇統〃〃神風日本〃を信じて疑わなかった軍国少年。長じてもどろ沼をはい出せずに過ぎた老残。

最近では循環器の故障も指摘された。「ストレス天敵」と医師。それを「禁煙もストレスの因」と曲解してたばこはふかし放題。家事一切は妻まかせ。寝起きは社会の常識を破って極めて遅い。それでいてすぐ息があえぐ。長期遊泳はとてもしゃないがおぼつかない。

かろうじて、文化協会会員としての誇りと自負心だけは残っている。第一に本の虫。「よくもまあ、飽きもせず……」と家族は言う。新聞は朝夕刊とも一〜二時間をかけてじっくりと読む。読み終えると切り抜き開始。

はさみは不要。三〇cm物差し大の薄い金属板を使う。めざす記事の先端に金属板をあてがい、縦へでも横へでもスッと引くとみごとに切り離れてゆく。新聞社時代に習い覚えた秘技。肩は凝らず、息も切れない。

切り抜きの対象は主として古代の遺跡や遺物。「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」と言い放った前ドイツ大統領ヴァイツェッカーの国会演説記事にも刺激されて、日々おさおさ怠りない。

分類別保管袋の中には黒塚古墳、キトラ古墳などと並んで『古今東西の傑物』もある。最近では早大大学院に合格して人生の再スタートを目指す野球解説者・谷沢健一さんが「殿堂入り」ならぬ、この袋入りを果たした。

網干会長がらみのスクラップも、同じ袋から取り出せる。たとえば平成十年三月二十日付某紙夕刊の文化欄。

「大切な実証的判断力 『わからない』も答え」の見出

しがおどり、関西大教授としての網干さんの最終講義の模様を大きく報じている。

先生はその記事の中で、今後の自己人生について次のように話されている。

「高松塚古墳の研究」「仏教考古学の研究」など六冊の大著の刊行に力を入れる。長生きしても仕事ができるのは八十歳までがいいところ。自分の学問の集大成をしたい。会長！健在。まだまだ中天に輝き続ける。

近未来、スッポンが実験動物としてロケットで発射され、月面に到達すること無きにもあらず。そのとき、『月とスッポン』は死語と化してしまおうでしょうかね
だって？

そんなこと知らん。お月さんに聞きなはれ。こちらの余命は、すでに尽きてしまっているはずである。

ミョウガのふる里

光岡 祐彦

四季の変化に恵まれた日本では、その季節の旬しゅんの食物を味わうことを、ささやかな楽しみとしてきました。現代では栽培方法の工夫や、海外からの輸入、流通方法の変化などによって、旬の食材も大分怪しいものになってきました。

そのような旬の野菜のひとつにミョウガがあります。ミョウガは夏の香味野菜として、刻んで「冷や奴」にふりかけたり、「お澄し」の実にしたり、あるいは春に出る若芽を軟白して食べるなど利用されていますが、いずれ忘れ去られるのではないかと思うくらいマイナーな野菜です。ところが歴史的には非常に古くから記録に残っている植物なのです。

まず「魏志倭人伝」に「薑・橘・椒・蕪荷が有るも、以て滋味となすを知らず」とあります（以て滋味となすを知らずの部分は誤りであるとの説があります）。また平城京長屋王邸宅跡から出土した木簡にも「名我ミョウガの醬ひしおす

け」と書かれた荷札が見られますし、「正倉院文書」、「延喜式」など多くの文献にミョウガの栽培、利用の記録があることから見て、日本人がかなり古くからなじんできた野菜であることがわかります。

それではミョウガはもともと日本に野生していた植物なのでしょうか。中にはそのように書かれている図鑑や資料などもあります。しかしこの植物が、まったく人の手の入ったことのない場所には生えていないところから、多くの植物学者の意見では、人がもたらした植物、人とともに移動した植物（人里植物）であると考えられています。

ミョウガはシヨウガ科の植物で、学名を*Zingiberioga*と呼びます。シヨウガは*Zingiberofficinale*ですのと同じ属に属しています。シヨウガ科の植物はほとんど熱帯、亜熱帯に野生しており、ミョウガはシヨウガ科の中でも、最も北で育てることの出来る植物です。日本では秋田県

くらいまで栽培されています。

われわれが野菜として普通利用しているのは花で、正確には花がいくつか集った花序と呼ばれている部分です。庭にミョウガを植えておられる方は、地面に筍のように顔を出した花序から、クリーム色の花びらが次々と咲くの気がつかれると思います。ところがこの花は普通は実をつけません。皆様の中でもミョウガの実や種子を見られた方は非常に少ないと思います。そのまれにつく果実は、成熟すると莢が3つに裂けて、真赤な色をした内側に、白い皮をかぶった黒い種子が2〜3個ついているのが見えます。

ではミョウガに普通種子ができないのはなぜでしょうか。それはこの植物の染色体数が奇数、すなわち55であるからです。種子によって子孫を残すことの出来る植物は、偶数個の染色体を持っているのが普通です。しかしまれに自然界の植物でミョウガのように奇数個の染色体を持つたものがあります。このような植物は種子で繁殖することが出来ません。たとえば田の畦などで美しい花を咲かせるヒガンバナも、染色体数は33で実をつけることはありません。このような植物はミョウガのように株

わけをしたり、球根で殖やしたりします。すなわち子孫はすべて同じ遺伝子組合せを持つていますので、今話題のクローン生物です。

では染色体数が奇数ですと、なぜ種子ができないのでしょうか。簡単に言いますと、うまく正常な花粉や卵子ができないからです。ミョウガの花粉ができるときの細胞分裂（成熟分裂と言います）を観察したことがあります。55個の染色体がとても混乱した動きをして、染色体がうまく2つの細胞に配られていません。定められたセットの染色体（ゲーム）が配られないと、正常な花粉ができないのです。しかし極めて低い確率ですが正常な花粉を作ることがあります。このような花粉が、これも極めて稀な正常な卵子と受精して、種子をつけることがあるのです。

このような現象から考えてミョウガは、鳥が種子を飛ばしたり、獣が運んだりなどして自然分布するようなことは想像できません。やはり人が栽培しながら、人ともに移動したとしか考えられないのです。現在ミョウガの存在が確認されているのは、日本以外では朝鮮半島南部、済州島、中国東南部です。韓国の植物図鑑によれ

ばミョウガは寺院近くで成育し、南部で栽培されているところがあると書かれています。また日本と同じように花および柔らかい芽を食用にするとあります。

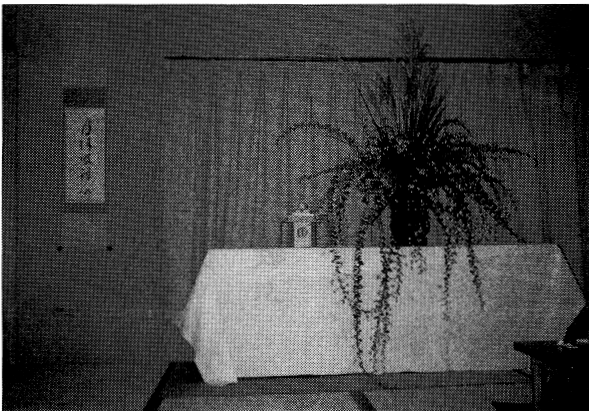
中国高等植物図鑑にもミョウガの記載があり、中国東南部に自生し、日本ではこれを栽培し、軟白した若芽や花序を野菜として利用していることが書かれています。

私が一九八〇年に中国、杭州植物園を訪ねたとき、園長は中国では根茎を薬用として利用しているとの話で、食用にはしていないとのことでした。因みにこの植物園ではヒガンバナの数種類と、日本のフジバカマ（中国名・蘭草）が植わっていました（両植物とも中国から日本に渡来したとされています）。

このようにミョウガは古代からわれわれ日本人が利用してきた野菜ですが、そのふる里はどうも中国東南部にあるように思われます。かなり古い時代にミョウガを食料とする人々が、移動とともに日本にもたらし、栽培し、現在も香味野菜として残っているのです。またその食感から考えて、イネの渡来に伴ってもたらされたのかもわかりません。

ミョウガのような小さな野菜も、現代の日本人のたどつ

て来た道について何かを語りかけているように思えるのです。



月 見 の 宴

漢詩

奉賀網干善教先生七秩古稀

片桐 一夫

考古高蹤朱雀丘

考古の高蹤 朱雀の丘

學風颯爽教倫儔

學風颯爽と 倫儔に教ふ

師方七秩不堪慶

師方に七秩 慶びに堪えず

賀宴恭陪丁丑秋

賀宴恭しく陪す 丁丑の秋

詠史

(天平十六年十二月八日
金鐘寺度一百人大梵會)

朱雀路傍燈炷燃

朱雀の路傍 灯炷燃り

金鐘寺域抹香煙

金鐘の寺域 抹香煙る

平城臘八百人度

平城の臘八 百人度さる

造佛奉承王法年

造佛奉承 王法の年

短歌

網干善教

仏の国 蓮華は咲けど恵まれぬこの子供らに幸あれと祈る

ガンジスの大河は永遠とわくに流れ逝く人の輪廻はいかになるぞや

土を掘り探ぐる学徒の手にふれて祇園精舎のありし日ぞ知る

波高く風吹きささぶ砂浜の北国の人辛らき今日かな

平城の地に住む人の明日がため文化の炎燃ゆるを願ふ

深 秋

荒居 智子

ひっじ雲うかぶ土曜日ほてりいる身の内旅の子感のような
子との旅久しくあれば語りつついくらの朱の粒をこぼせり
移りゆく雲の間に明滅するナイトフライトの灯はいずくさす
たまりたる露を払うと野に出てて秋の雲雀の高鳴くを聞く
練習曲亜麻色の髪の乙女香ぐわしき秋の気のなか子はひたに弾く

過疎の村

宇野木 久代

着膨れて立話しする朝市は日曜のみの友も出来居り
一人来ておきな草みつけ笑みこぼる過疎の山路によくぞのこれり
田舎では食みし事なき路のとう八十路に近く摘みて楽しむ
双の手を空にひろげてわが髪にも肩にも春をうけとめてゐる
過疎なれど小鳥の声も太陽も緑の空気も一人じめしてゐる

黒塚

大浦小枝子

邪馬台國畿内説かと黒塚の現地説明長蛇の列なる

出土せし古代の鏡よ秘めし事語りくれるや平成の世に

出土せし三角縁神獸鏡の三十三枚いにしへのままなる位置に

棺朽ちし跡の土朱のあざやかに黄泉路ゆきたるいにしへ人よ

黒塚の発掘説明すみし今報じし紙面をまた出して読む

文学散歩

岡田越子

早々とバスの席とり友と並びはずむはずむはおしゃべりすずめ

絵の如し東条名下り新緑の山藤・桜・つつじとあきぬ

「孤愁の岸」読みて行きにし岐阜海津の三大河川はゆうゆう流る

命かけし薩摩藩士の難工事を展望台にて目をうばわれる

資料館の古き道具を一つづつ昔思ひ出し友と名を読む

考古とうとし

片桐 一夫

考古学高きあしあと蹤の師の君に古稀の祝の歌たてまつる

堂々と煌きてあり金の鷗尾しび朱雀の御門を仰ぐみ空に

東院の汀に佇ちて眼とづればげいしやう霓裳みやびに歌姫の舞ふ見ゆ

石槲の四壁を四神に守られしキトラの貴人の哲学たかし

天空の星宿の巡りに安らぎてキトラにねむ瞑りし宮人なつかし

ないと・きやつぶ

木庭 和子

遠くあればわけてきらめくシリウスよ 消さねばならぬ胸の炎は

うつしみに触れざる恋のすがしさをジムノペディ かすかに流れて

夢見ナイトキャップ酒とろりと呑めばケ・セラ・セラ薔薇の棘さへ新芽にみえて

枯木抱いてしづかにゆれるよ大正池失ひしものかぞふることく

継続は力と持みノンシヤラン楽しみてする短歌・フランス語

幸せといふは

沢田実子

床に臥し風邪と戦ふ一月余娘に背さすられ目覚むれば夢

風邪癒えて窓辺に寄ればケキヨケキヨと祝ひてくるる幼なウグイス

日に干せる布団ふっくら暖し幸せといふは健かなこと

虹色のマフラー添へし宅急便若くあれよと娘にはげまさる

雨にぬれみどり色増す苔の上椿の花は色あせて落つ

生きる

玉置小代

会ふたびに言葉少なくなる老母のみかんむく手をそつと触れみる

また来ますと別れし母への約束をいまだ果せず春は行くなり

いくたびの苦難に堪へてなほ生きる老母の白髪梳しらがすきやれば哀し

耳遠く目も衰へし母なれど九十五才を懸命に生きる

ようやくに蓄ほどけし木蓮を母にとどけむ雨上りの朝

旅立ち

中川都哉子

若きらが旅立ちゆけば沓脱ぎのしらじら広し朝も夕べも

案じたる空は明るみ振袖の藍冴えざえと孫を包めり（孫の成人式に）

エスカレーター一瞬ためらい母の手をはらいて乗りし児 越えたるは何

寂しきにあらねど冬の人気なき公園を歩み空を眺め来

わが眠る日もかくありて欲し初夏はつなつの夕べ雲の端金はにきらめく

ベル

福井秀子

外出に化粧するのが億劫と思ふは鬱うっのはじまりと医師の言ふ

携帯のベルの鳴る度に声高く話す男よ新幹線に

階段を踏みしめ登る傍を若きは軽く追越して行く

紅葉の里の向ふに冠雪の岩手富士みゆホテルの窓に

ガイドの話す南部と津軽の仲悪きもろもろ聞きて車内の笑声

米寿の祝

藤原

香

まろやかに師の老いませば弟子^{つと}違ひ米寿の祝に雨も晴れたり

お茶の道長きに渡るつきあひも先輩つぎつぎ病に倒る

若き人移動はげしきアパートの経営難を目のあたり見る

筆作る為に生毛をのばしてた幼児さっぱり散髪の頭

落のおよもぎつくしを送り来る愚息の友は山里住い

春夏秋冬

松村 せつ子

小雨ふる湖東三山人もなく近江の春は静もりており

見渡せば深きみどりの杉木立晩夏の鞍馬にひぐらしのなく

何もかも隠してくれそなすすきの穂曾爾高原に秋深まりて

水仙のほのかな香り愉しみつ氷雨ふる日に初生けをする

伴せは凡庸なりし日々^にあり夫の選びし花の苗買う

白き空間

森田陽子

光る花卉^{しべ}触れなば白き花散らむ重きに耐へて咲ける芍薬

生き死には隣り合はせとうべなひて桜花^{はな}光充つ瑠璃の空見る

海近き風の香りにアカシアの白き花揺るる大連の夢

手風琴ビイドロピエロ 初秋^{はつあき}の小樽の街の運河すずしき

放たれし風船に似たるわが思ひ空の深みの藍に溶けゆく

若葉風そよぐ

山崎 たみ子

手話まじえ新幹線の窓越しに難聴の姪と別れを惜しむ

障害の哀しみ言わず職場にて受くる親切つづり来姪は

かえりたての小鳥の羽根を思わせて櫛の新葉は芽吹き初めたり

わが裡に芽吹き初めたる詩心も育まれたしこの春雨に

若葉風そよぐ五月の中空に気化してみたき夢を泳がす

傳道の人

棉源瑛子

キリストの布教戸毎に拒ばまるる母親らに随く児らなに思いいむ

この児らの時間惜しとは思わずや児連れ戸毎に耶穌薦む女性

チャイム鳴りキリスト教という声にドアを開けずにお引取り乞う

家毎に門前払いを受けつづけ耶穌の伝道ひそと立ち去る

伝道の訪い戸毎にこばまるるをドア越し聞きつつさびしみて佇つ



俳句

曝涼

牧野春駒

堂縁を雨の洗ひし業平忌
 焙炉師の焰の色をよみとりて
 曝涼や累々として南朝史
 いたつきの躬をつたひつつ一葉落つ
 睡蓮を寺苑の枯れの終りとす
 大楯を参詣人の覆へす
 古代鏡出土したるが恵方かな
 神将の忿怒見て果つ探梅行
 帯織って糸の春光走らする
 僧の手に念珠かなりし桜狩

(註「曝涼」|| 虫干。夏の季語)

角 切

拝観の客に抱かれてゐる子猫

伊藤柳紅

穂芒の絮のとび立つ風を待つ

勢子の影重なり合うて角を切る

川底に大枯木影横たはり

父母に受く髪膚痛めて寒灸

埴 輪

母の忌の明くふるさとへ旅はじめ

岡 良子

梅東風や埴輪めぐらす古墳丘

金婚を子等に祝がるる雛の間

獣の眼ひそむサファリの夜涼かな

高原を行きて蜻蛉に包まるる

瀧

豆御飯食みて何やら満たされぬ

大浦 小枝子

濡れ傘の中よりしじみ蝶飛べり

水の色束ねつ瀧落ち来る

溪流を集めきたりて瀧白し

紅葉して女人にやさし結界所

春 火 桶

鳩も寄る梅見の集ひ歌も出る

柏木 一枝

春火桶遠き記憶のよみがへる

覚え書きして忘れし豆の花

亡き人を偲ぶ漆器にあやめ添え

老どちに野鳥の森の小春かな

春 光

喜 多 ま さ

春光は閉ぢし臉の裏にまで

抱き重る曾孫を膝に日向ぼこ

老いゆゑのもつ華やぎの梅見かな

初時雨相輪映ゆる東大寺

終りの日知らぬがたのし老の春

三月三日

木 村 長 子

三月の三日の隅にゐる老女

汗のものを襤褸のごとく投げ込みぬ

吾亦紅揺れて夕日に叛きたる

漢たち何故に髭おく秋の風

影もまた老いてゆくなり冬灯

薺 粥

込 山 山 歩

嬰かとも蹠ぢやひらたく寝釈あうら邊かな

瀧壺に瀧まつすぐに突きささり

品書なすながゆに書きそへられし薺粥

うどん屋のまだ灯りをり追儼ついなの夜

観梅やゆつくり歩く大鴉

針 供 養

坂 本 よ し ゑ

はるばると錆針二本針納む

紅白の水引掛けて針納む

杖曳きし若き娘もあり針納め

針納め磯着の髪も交りをり

こんによくに挿せしもありし針納め

この寒さ

一人っ子に多き友あり茅の輪かな
辻 田 しま代

日本酒が凍つたといふこの寒さ

ホスピスの部屋に集ひし聖夜かな

寒椿旅で覚へし手話少し

齋なすな打つ嫁女が唄はらふ被はらひ歌

秋 扇

春着縫ふ変らぬことを幸として

南 村 照 栄

雪間草鬼門はいつも美しく

コピー機の静かに動く涅槃寺

むつかしき話となりぬ秋扇

頭を並べ鳥賊泳ぎゐる年忘れ

更 衣

新築の庇にはやも燕の巢

西 田 たまみ

手も足も取られ マネキン更衣ころもがえ

犬小屋に犬もう在らず寒に入る

相応の幸せありて秋刀魚焼く

花散って鳥の歩く駐車場

花 菖 蒲

風出でて落花の色の薄れけり

西 山 佐代子

黒南風はくえの山の向ふは雨なりし

雨傘大きくふくれ花菖蒲

フランスの旅へ浴衣を縫ひ上げし

射干ひおうぎのしほみはじめし忌を修す

秋

わが五体信濃の秋に浸りけり

藤澤陽子

山莊は夫婦で仕切る菌汁きのこ

十六夜いざよひの一笔箋に余白なほ

鈴虫や犬おだやかに眠りたる

照り映えて紅を刷きたり椿の實

夏の蝶

鳥に見られて熟れてゆくさくらんぼ

堀池敏子

投函の歩を氣遣ひて夏の蝶

空腹に昼の花火の白煙

初潮やことばは己に青年に

神風の浜風なみざわたる神の留守

桜の木

木の又におのが花屑溜めてをり

牧野和代

空蟬うつせみをここたく掃けり桜の木

水神に厄日の花を手向けに来

末枯の及ぶ二の井戸三の井戸

童謡のキリンが風邪を引くといふ

霜焼け

大淀の冬日を返し解行く

三井サチ子

溜まりたる写真整理に夜の長き

霜焼けの指先アロエつつみこむ

島土産あれこれ迷ひ目刺買ふ

母の日や一族おくれず揃ひけり

山法師

今日限り離る職場の山法師

村上俊子

待宵や記憶の中の五條坂

宮参り

寒椿開き初めたるおちよぼぐち

山内梅乃

美術館出づれば鳥の渡りぬし

若菜摘みつつ思ひ出す事のあり

虎落笛しうり民話の中の埜のてゐる

春立ちて水琴窟みどりこの響きくる

まんさくや心の襞ひだのありどころ

嬰兒みどりこに櫻蕊しんべ降る宮参り

寒紅

寒紅をひきてジャンクを眺めけり

森田陽子

柘榴の実

立春の時計塔より正午の曲

和田美代子

桜満つダムの湖底に村ありて

菜の花や同じ高さの兵の墓

底に背を押されて歩む花の道

雲の峰連なる山の名は知らず

フラメンコ汗光らせてかし檉若葉

低く来て低く消えゆく秋の蝶

寺の磴はら下り来てはら薔薇の香の中に

昨日より深き空なり柘榴ざくろの実

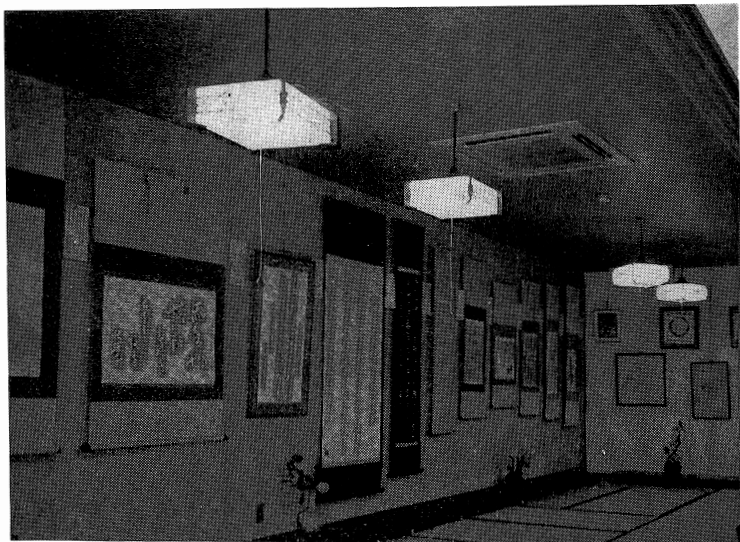
グループからの便り

歴史教養講座

西村 通弘

私がこの講座を聴講し始めてから約一年になりました。うか。話題豊富な網干先生の巧みな話術に引き込まれて二時間の講義が、あっという間に終ってしまいます。いつも会場が満席になるわけがよくわかります。

さて、この一年を振り返ってみて、この講座に関連するビッグニュースとして、私は次の三件をあげてみました。まずその第一は、何と言っても今年一月十日に発表された『天理・黒塚古墳の銅鏡大量発見』のニュースです。素人の私も妻と一緒に雨の中を現地見学会に参加しました。現地は長蛇の列、考古学ブームとはいえ、熱心なファンの勢いに圧倒されました。一方、この講座でも早速この話題を取り上げて下さり、一般の人には入手が難しい豊富な資料を基に、詳しく、解りやすく解説をしていただき、理解を深めることができました。歴史的大



発見があるたびに、耶馬台国論争の声が高まりますが、先生は『実証的立場からこの論争についてはコメントを差し控える態度』を貫いておられるように受けとめました。

さて、第二のニュースは『キトラ古墳における超小型カメラによる石槨内の探査』をあげます。一九八三年に行われた第一回目の探査で既に北壁に玄武図が描かれていることが公表されておりましたので、黒塚古墳のニュースほどの衝撃力は感じなかったのですが、今回の探査では、東壁の青竜図、西壁の白虎図、天井には星宿図が描かれていたことはご承知の通りであります。これらの図と古代中国の思想との関連についてのご説明を承りましたが残念ながら私には理解できないままであります。ただこの星宿図に赤道、黄道が描かれていたとは、当時の天文知識のレベルの高さにただただ脱帽するのみです。

第三のニュースは『網千先生が昨年末でたく古希を迎えられた』ことあります。あのエネルギーシユな若々しさの秘訣は一体何なのか、考古学の講義と併せて健康法についてもご伝授願いたい。大学の規定では七十歳が定年だそうで、今後は名誉教授として引続きご活躍され

ます。そもそも考古学ブームとか古代史ブームといわれる切っ掛けとなったのは、先生が発掘調査なさった高松塚古墳の壁画発見ではないでしょうか。本来地味な学問であつたらう考古学が結果として一躍ブームを巻き起してしまいました。

取り留めなく書いてきましたが最後に雑感を付け加えさせていただきます。その第一点、この地球上では宗教民族間の対立による紛争が絶えません。この原稿を書いている時、パキスタンが核実験を行なったとのニュースがテレビで報道されました。緊張緩和を願いながら歴史の勉強ができる日本の国は平和な国だと実感します。

第二点はこの平城ニュータウンに移り住んでラッキーであつたと感じられることです。文化協会やスポーツ協会の行事に参加させていただくことにより、多くの方々との交流ができ、楽しい毎日です。当講座に限つていうならば、聴講は毎月第二火曜日十〜十二時に出席可能な人たちの特権になっています。もしこれが土曜日の開催であればもっと幅広い多くの人々が聴講できることになると推測します。但し先生のご都合や、更に広い会場の確保等簡単に解決するとは思えませんが、実現すれば、

すばらしいことだなあ位の無責任な思い付きと聞き流しておいて下さい。兎に角、すばらしい講義内容ですから、できるだけ多くの人々に聴講の機会がもてればとの思いから、こんなことを考えてしまいました。

地酒を味わう会

松本 敏夫

酒縁、奇遇なり

会い難き人と出会い、好きであろうが嫌いであろうが一瞬のうち、今ここで語り合い、酒を酌み交わす。思えば不思議なことである。機が熟したというべきか「地酒を味わう会」誕生以来九十五年、第164回の会合を迎え、会報でもなく、機関誌でもなくごく自然に、どのような枠にとらわれない「何か」をつくろうということになった。名前も即興的に決まった。「鯛の鯛」。何も残らないようだが何かある。そんなスペースと時間をつくってあげたいと思う。最後に当会の誕生に尽力された故永田喜一郎氏はじめ、活動にかかわってこられた諸

先輩に改めて敬意を表し感謝する次第であります。合掌。こんな書きだして四月十一日の例会（毎月第二土曜日）に「鯛の鯛」創刊号は日の目を見ることになった。

文化協会会長の網干先生からも（「団地とかニュータウンでは近隣に住む者が共に酒を酌み交わす機会が非常に少ない。田舎では雪降れば雪見酒、農作をすれば日待ち酒とかいつて酒杯を交わす。これが重要なコミュニケーションとなる。平城ニュータウン「地酒を味わう会」はその理想を実現しようとするもので文化活動の中でも高く評価できる。これからも楽しく乾杯して、地縁集団の結束を強められることを期待したい」との励ましの言葉を寄せて頂き、誠にありがたく感謝致しております。

その「鯛の鯛」創刊号から当会会友の杉山弘朗氏の一文を「酔友アゲイン」と題して「地酒を味わう会」の自己紹介として再録させていただきます。

「何でもありで原稿用紙二枚半」という注文で請け合っただものの、これが意外と課題がないと書けないもので、考えるとこれは「人生」のようなもの。寿命という有限の時間（原稿用紙）の中で自己決定して暇を埋めていく作業と言えます。「何でもあり」ですから、自分を主役

とした脚本を自分で書いていくことが「自己決定」ということになりましょうか。もちろん他人の脚本においては自分は脇役であることを自覚しなければなりません。時には他人の脚本を少し借りてきたりすることなんかもあり。しかし、問題は自分で書いたと思っていた脚本が、実は、親や先祖代々からの脚本ということもあるわけですね。この辺になると話がややこしいので興味のある人は「交流分析」と書かれた本を読んでみてください。

本当は「人生何でもあり」でしょうが、そんな自由というのは不安の源泉であると言う方もおられますし、こんな訳の分からん世界に独り生み落とされたから、人間というのは皆、出生外傷があり不安があつて当たり前であるという見方もあるんです。ですから「助けてー」ということになり、親に依存し愛されることで、世界に対して安心感や信頼感を育てていくようですよ。

そう考えると「人類皆依存症」とも言えそうです。親依存症からカアちゃん依存症にクラ替えした人もおられますし、母親に十分甘えられなかった人は、代償の対象を探し求める脚本を書かれるかもしれません。

依存症という代表格が「アルコール依存症」ですが

これは遺伝子的になりやすい人とそうでない人がいます。以前は「意志が弱い」だけの問題としてとらえられていましたが、最近ではアルコール依存症メーカーや配偶者の共依存症などが研究されており、「病氣」であるという認識が必要なようです。どうせ依存症になるなら、まず自分が楽しく、その行動パターンが人を楽しませる結果を生むにこしたことはない訳です。もともと、人は寂しがり屋の不安な神経症的動物で「ヒト依存症」とも言えますが、特定の人に依存しますと「ワシも症候群」とか、「濡れ落ち葉」の例もありますが、依存される人も迷惑でしょうし……。

そんな時は「地酒を味わう会」に入会してもらって、酔友と粹遊していただき、いろんな人々とのコミュニケーションで依存症を満足させていたかどうかという趣向はいかがなものかと……。

(朱雀在住・50歳)

「地酒を味わう会」の今後の活動予定としては、毎月第二土曜午後六時より(八月のみ別)毎回、所を移して転々と時にはニュータウンの外へはみ出ることも。各地を飲み回った「揚げ句」は秋の文化祭にて若干の酩酊とともにご報告させていただきます。

揺るぎなく 虚空つかみし 牡丹かな 敏夫

▽連絡先〓当会事務局長・鈴木 71—1690まで。

お開きとする前に、当会初代会長・吉田篤史氏の言葉で締めくくりたいと思います。

人生、同じ生きるなら幸福に暮らしたいもの。それならどういう日常生活を心掛けたらいいでしょうか。よく言うに、子のない親はありますが、親のない子はありません。生きている間は親であり、死んだら先祖になる。できる限り親孝行をする。先祖を拜む。木、静かならんと欲するも風やまず、親に孝ならんと欲するも親待たず墓石に布団も掛けられず。生まれた以上、生老病死は避けられない。若い若いと欲望に明け暮れしているうちに髪の毛に白髪がまじる五十、六十はアツという間です。ご用心、ご用心。(右京在住・90歳) もちろん現役！

野草の会

前川 良雄

平成も早や十年目を迎えて地球全体に環境問題がひろがり、生物に悪影響を与えて絶滅の生物の種がでてきています。小鳥は繁殖旺盛でだんだんとふえているように思われます。反対に草木や虫は種類が減少してきているようです。特にバッタ、トンボ、メダカ、カエル、カニ等子供たちにとって遊び仲間の昆虫がなくなっているようです。子供のころ学校よりの帰り道で赤い爪をしたカニが小川の石垣より10匹、20匹と顔を見せて迎えてくれた思い出があります。道しるべという昆虫は5mほど先に道の真中に立ち止り、わたしが近づくとまた5mほど前へ飛んで行つては止り、本当に道案内をしてくれました。グロテスクな蟻蛙は子ども心に恐ろしく感じました。青大将という蛇が体をくねらして逃げていく姿もおもしろいものです。青大将が蛙をひと呑みにのみこんで腹の真中がふくれあがっていく様子、懐かしい生物の状態が楽しく思い出されます。

野草も同様でレンゲ、スマレ等は姿を消し、アメリカ

より入ってきたアメリカセンダン草やセイタカアワダチ草等が大きな顔で勢力をのぼしています。右京三丁目の三号公園は野草の宝庫で、時節がくると次々と可愛い花を咲かせます。本年は暖冬のせいか、いつもより早い時期に芽を出していました。三号公園やふれあい橋の植木の間よりヤエムグラが芽を出し、大きな木の間より上へ上へと生い茂り、五月の中頃に実がなっています。イヌノフグリ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ等も三月の終りに紫の可愛い花を咲かせています。

三月障害者の会で花見をした時に四つ葉のクローバーを見つけてました。その時三号公園にツクシがたくさん顔を出しているのを見つけてました。二本、三本、五本六本と見つけました。孫にツクシを取りなさいと教えてやると、一m先に見えているのに「ツクシってどれ、知らんもん」と言うのに、今の子供が自然との触れ合いの少ないのに驚きました。私の家の小さな庭にひまわりが芽を出しています。血どめ草は湿気の多いところに群生し、ハコベは白い花を咲かせ、ギンギシは赤い花が群って生え、いずれも食べられる野草です。

わたしはふれあい橋に生い茂る野草がなかなか勢力旺

盛でつつじの植木を枯らしているのを見るにつけ、もう少し手入れを丁寧にしてやったらと残念に思われます。自然を大事にしてホテルのとびかう清潔な町にしたいものです。

拓本を築しむ会

込山 博介

拓本に魅せられて

三十年余り前、伯父の歌碑が建てられたとき、これを拓本に出来ればナァと思っていました。大阪の原田常太郎先生にめぐりあい、拓本のご指導をいただき、十枚ほど採拓することができました。それは巾65cm、長さ1mの大きなものでしたが、はじめとしてはまずまずの出来ばえで、兄弟らに配り喜んでもらい、希いを果した思いでした。

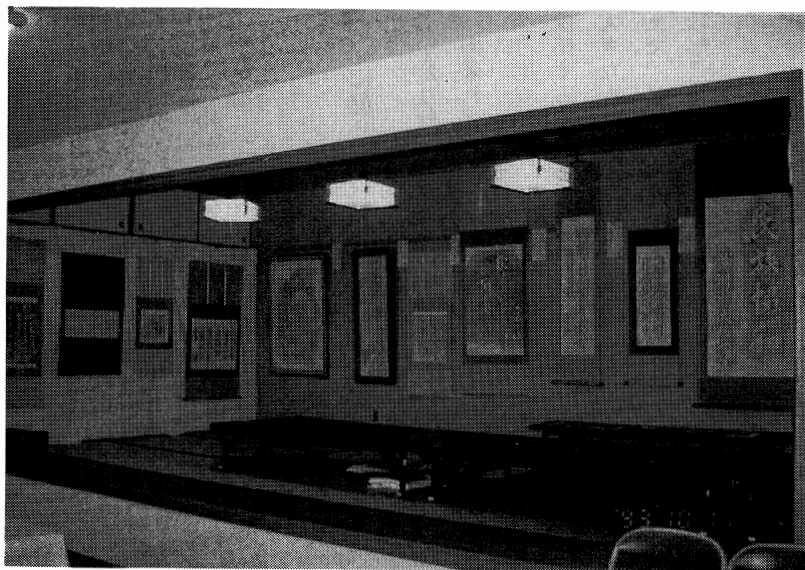
その後しばらく拓本から遠ざかっていましたが、十年前、平城ニュータウンに引越して来て、その年の秋、文化祭に拓本が展示されているのを見て、早速渡辺会長さ

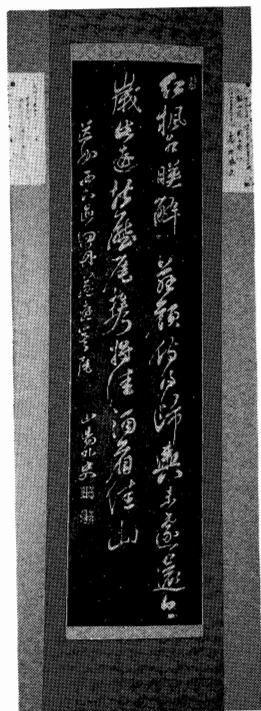
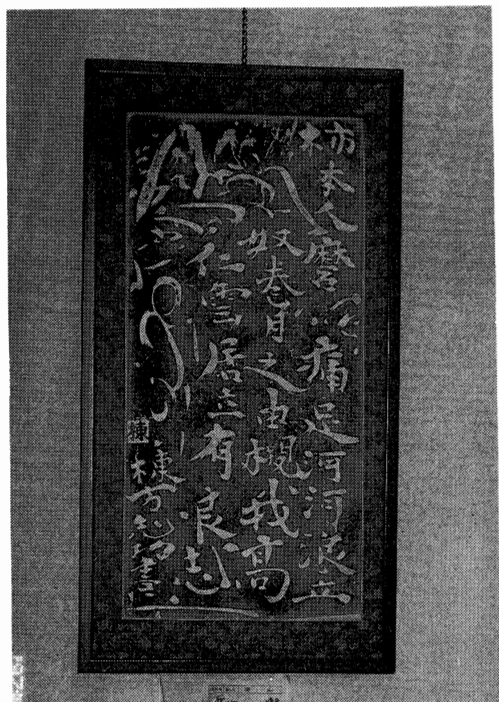
んにお願いで入会させていただきました。

はじめて会から連れていただいたのは、大阪南千里公園で、そこには有名な萬葉の歌人 額田王の「茜さす紫野ゆき標野ゆき……」をはじめ、張継の「楓橋夜泊」の詩など著名人の詩歌の碑が十数基建っており、これだけの立派な碑が一ヶ所に集まっていることなどはじめて見ることで、しかも採拓自由とあり、忘れていた拓本ということに改めて目覚めたように、夢中になって採拓したことでした。

その後も、多武峰、山の辺の道、また伊丹市昆陽池、等々あちこち連れていただき、いろいろな碑を採拓し、また淡路洲本市の「宇原文学の森」では小さな丘に大小三百基に及ぶ文学碑に出会い、信州上山田千曲川の「萬葉公園」では土地にまつわる萬葉碑や文学碑が並び、一泊の採拓旅行で珍らしい詩歌の碑や又楽しい絵の彫られた石碑なども採ることができ、この十年の間に随分楽しい作品が揃いました。

尤も作品といっても初めのうちは、タンポの使いわけも分らないまま、ただボンボン石をたたくばかりで、家へ持ち帰り乾いたのを見ると、思わぬ所に濃いタンポの





形がついていたり、目もあてられないような出来もありたりで、後日一人で採り直しに出かけることも再々のことでした。それでも次第に要領もよくなり、墨の濃淡も加減できるようになりました。

拓本ができると次に裏打ちと表装ですが、これも渡辺会長さんのご指導で何本かの軸も出来ました。また洋間に掲げられるようにパネル作りをしたり、誰にでも簡単に出来るものとして、仮り表装をも奨めるようにしています。

はじめの内はただ拓本を採ることが楽しくて夢中でしたが、落ち着いてみると、萬葉歌にしても他の古歌にしても読めない文字があったり、意味の分らないものがあったりで、改めて萬葉集の本を繰ってみたり、仮名文字の手本を開いたり、時には図書館へ行ったりしてだんだん深みにはまり込んでゆく思いです。

会員の方々も二、三人連れ立って採拓に行ったり、旅行に簡単な乾拓の用意をして行き、旅先の思い出を作ってきて来られるなど、文化祭の時には珍らしい拓本が出品され、いよいよ興味津々です。

拓本を採るには天候が大きくかわります。

石碑に水で和紙を貼りつけるので、雨の日、風の日は避け、又寒い冬はいつまでも乾かないし、暑い夏は反対に早く乾きすぎてタンポが打てず、このため春や秋の行楽シーズンがよく、それも午前中が適当と思われます。そして採拓予定日が近くなると、テレビの週間天気予報が気になり、なんとなくそわそわ落ち着かず、それだけに天候に恵まれ、意に叶うような作品が採れた時の喜びは格別のものがあります。

道具を入れたリュックを背に

グループの仲間と共に

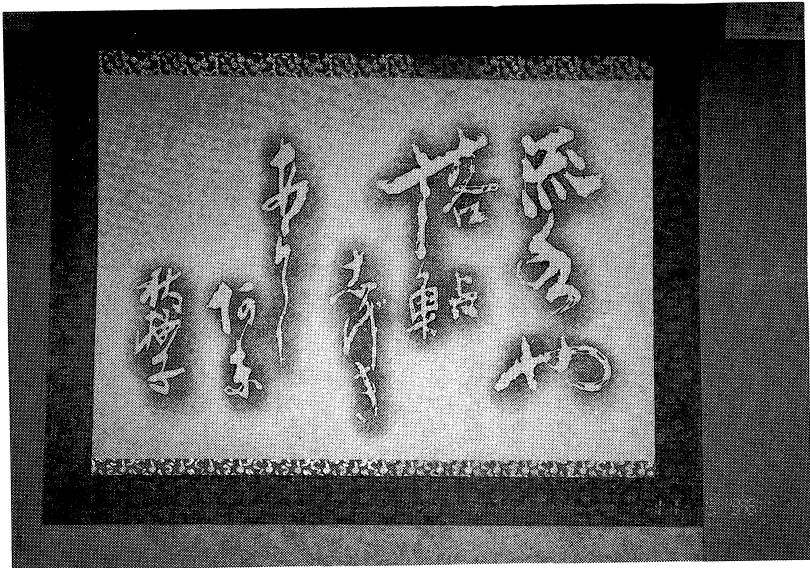
野外に出て 鳥の声を聞きながら

タンポを打ったのしみ

拓本という もうひとつの趣味に

あなたも 参加しませんか

お待ちしております



読書会

林 美智子

平成九年度、読書会の活動

四月 谷崎潤一郎著 吉野葛

五月 文学散歩 吉野方面・和紙づくり

六月 遠藤周作著 深い河

七月 宮尾登美子著 松風の家 上・下

八月 宮尾登美子著 朱夏 上・下

九月 向田邦子著 眠り人形

十月 津本 陽著 開国

十一月 ロバート・ジェームス・ウォラー著
マディソン郡の橋

十一月三十日 映画鑑賞会 深い河

十二月 今 東光著 毒舌日本史

一月 舟橋聖一著 花の生涯 上・下

二月 杉本苑子著 孤愁の岸 上・下

三月 司馬遼太郎著 故郷忘れじがたく候

文学散歩 吉野へ（和紙づくり体験）

四月に谷崎潤一郎の「吉野葛」を読み、本年度は吉野方面への文学散歩が計画された。本文の一部を紹介すると、

「くず」と言う地名は、吉野川の沿岸附近に二箇所ある。下流の方のは「葛」の字を充て、上流の方のは「国栖」の字を充てて……略……国栖の方では、村人の多くが紙を作って生活している。……略……それでも今時に珍しい原始的な方法で、吉野川の水に楮の繊維を晒しては、手すきの紙を製するのである。（吉野葛より）

この作品が発表されたのが昭和六年で、谷崎は既に二十年程まえ、吉野の奥に遊んだ話としていたので、明治の末ごろの村の様子が描かれている。

文学散歩では、この作品に書かれた国栖の地へ行き、昔かわらぬ方法が続いている手すき和紙を、体験するの为一の目的であった。

五月二十三日（快晴）参加者二十名はバスに乗り、一路吉野へ向かった。事務局長の事前の交渉で、和紙づくり第一人者といわれる福西氏宅へ着いたのが十一時前だった。同じ奈良県でも吉野までは三時間以上もかかったこ

とになる。ふと道端の石の道標を見ると、「国栖村窪垣内」と書かれてあった。文中にある古い手紙の差出人の住所と同じである。

福西氏宅は、今も昔ながらの方法で吉野和紙を漉いておられるお宅で、庭先に所せましと板張りの和紙が干してあった。

少し説明を受け、軒先に準備された漉槽の中の液をスダレの上に流すのが、私たちの作業である。

冬の寒い時期に、川の中で楮を何度も水洗いしたり、釜で煮たり、柔かい腰のある和紙にするために、ていねいに叩きつぶしたりと、紙漉きに至るまでが大変な仕事である。そうして作られた白いなめらかな最終段階の液体の前に私たちは順次立った。

一人一人、スダレの上に液をすくい取り、ゆすり、Yさん持参の押花をいただいてのせ、と色紙二枚分の和紙づくりにも、福西氏の手を借りての作業となった。普段無造作に使っている一枚の紙も、大変な過程を経てのもののだと、改めて大切さを感じさせられた。今日の手づくり和紙は、後日仕上がって届けられるというので、楽しみにしてその場を辞し、次の見学地へ向かった。

時々、新聞やテレビで話題となっている大滝ダム工事現場へ着いた。やがてダム湖底に沈む丹生川神社とその周辺は、つい最近まで大木に囲まれた、静かな村であったに違いない。直径三米程もある木は、根元近くから切り取られ、神社のやしろだけが淋しく建っていた。近く移転されるらしいが、この雰囲気は失われてしまうとと思うと、住民でない私たちも、とても惜しい気がした。

昼食は、見た目も味もすばらしい、吉野杉の香の手桶弁当をいただき、気路「蜻蛉の滝」の見学や、これも本文中詳しく書かれていた妹背山を話題にして、本年度の文学散歩を終えた。

文学散歩は、参加自由で、課題図書を読んでいなくても、十分楽しめる企画である。多くの方が、これに参加し、読書会に入ろうと思ってくたされれば、大歓迎である。

詩吟の会

西尾 弘子

♪

べんせい〜 しゆくしゆくウー

よる かわをわたるウー

♪

子供の頃、父が仕事をしながら口ずさんでいた変な歌——それが詩吟の『川中島』だということを知ったのは、社会人になってからでした。

詩吟とは、正に「詩を吟じる」こと。お腹の底から声を出して詩を歌い上げるのです。主として漢詩を吟じるのですが、時には和歌（主に万葉集）や、俳句も吟じます。ですから文学や、又、その詩の作られた背景を知ることによって歴史の勉強にもなり、会員の中には吟じることよりも、詩や歴史についての先生のお話を楽しみにしていられる方もおられます。

しかし、私が詩吟を始めた動機は、そんな高尚なものではありませんでした。音痴の私は宴会の席で何かやらねばならない時など、みんなのように歌を披露すること



(新年会)

ができません。ほとほと困っていた処、たまたま出会った旧友が詩吟を習い始めたという話を聞き、『余り皆のやらない詩吟なら、少々下手でもわからないのでは……?』などという全くいい加減な考えで始めたものでした。初めの頃は大声を出すことが恥ずかしく、ぼそぼそとやっていたのですが、思い切って声を出した方が音程の安定することを知り、今では恥ずかしげもなく大口を開けて大声を発しています。

詩吟の一番の効用は、私に言わせれば、ストレス解消。第二に健康保持。大声を出すことは、腹式呼吸になって健康にとても良いそうです。そのことを身をもって証明してくださるのが、今年八十九歳になられた吉本先生です。えっ! 八十九歳? さぞや——と、腰の曲がった老人を御想像の方は、一度水曜日北部出張水会議室にいらしてみてください。のびのびと張りのある若々しい先生のお声が聞こえてきます。私がこの会に入会して十年近くになりますが、そのお声は少しも衰えを見せず、犬を連れ、スニーカーを履いて颯爽と、毎日一万歩以上を歩かれるという元気さです。

元気で長生きしたい方、音痴の方、そして勿論声に自

信のある方も、どうぞ詩吟の会に入会してください。現在、四十代から九十代まで二十数名の会員が、第一・第二・第三水曜日に午前と午後に分れてお稽古しています。最後に、昨年度一年間の主な行事を挙げておきますが、その大部分は私達の会が属している真風流本部の行事であり、参加する・しないは全く自由です。

四月 昇級昇段試験

奈良県詩吟連盟競吟会一次予選

(奈良県中の詩吟愛好家が喉を競う)

五月 歴史探訪(琵琶湖方面へ日帰りバス旅行)

六月 奈良県詩吟連盟競吟会二次予選

七月 奈良県詩吟連盟競吟会決勝

(私達の会から二名入賞しました)

九月 阿部仲麻呂を偲ぶ会 於・春日野荘

(お月見を兼ねての詩吟講習)

十月 昇級昇段試験

十一月 文化協会の文化祭で上演の部に参加

歴史探訪(毛利元就ゆかりの地を訪ねて

広島県へ一泊旅行)

一月 本部新年会（於・奈良シティホテル）

二月 高の原詩吟会新年会（於・レストラン花鹿）

三月 真風流競吟会

（私達の会から四名入賞しました）

— × — × —

これらの行事には全く参加せず、月三回のお稽古だけを楽しんでいる方もいらっしゃいます。どうぞお気軽に御入会ください。お待ち致しております。

パッチワーク研究会

打田 照子

このパッチワークの集まりを、月二回持つようになって何年たったでしょうか。

毎回、各自が思い思いの布を持って来られ、これを入れる袋を作りたい。タペストリー、こたつかけ、テーブルクロスと、自分の家庭で今いるものを作ります。

私一人で作っている時は、自分の好みの色目の配色でしたが、各人の好みは違いますし、思いもよらぬ布合わせで、「ワー、すごい。」と感動し、私も次はこのような

配色にしようかなと、製作意欲が湧いてまいります。少しのアドバイスだけで、お姉様方はすぐに理解して下さい、又、この方法はどうかしらと、教えても下さいます。先生と生徒という関係でなく、姉妹の集まりでありたいと思います。

パッチワークの事だけでなく、ケーキの作り方、夕食のメニュー、旅行等々、いろんな雑談も楽しい一時です。ぜひ一度興味のある方、覗きに來て下さい。

中国語同好会

大野 英子

言葉のひびきに誘われて入門した中国語同好会（松村如洋講師）ではありますが、早いものでもうすぐ一年目を迎えることになりました。

私は全くの初心者ですが、いつの日でしたか中国女性の美しい言葉を耳にしたときいだなあとお変興味を持つたことがあります。

同じ東洋人で顔も姿も良く似ているし何かしら非常に親しみの持てると申しましようか、お友達として楽しく

会話が出来たらいいなあと夢のような希望を持っては居たのですが、文化協会で講座が開かれましたとき本当に興味本位で何の遠慮もなく同席してしまつたのです。

先ず松村先生は大変やさしい世の中にこんな親切な方があるものかと思われる素敵な人格者でいらつしやいます。

第一日は確か你好テイナと自分の名前の方から始められたように覚えています。

お友達はその時から今も七、八名で比較のお若い方が多いようですが、中には私のように還暦を過ぎた者も混じつて居ります。

私は元来「マイペースの大野」とよく言われました人から「幸せな性格だねえ」などといやみを言われる事もしばしばですので、時々振り返つては皆さんのご迷惑になつていないか、又ご迷惑にならないようにしなければと私なりの努力を重ねております。

が、毎週木曜の受講日は比較的時が早く流れて来るよ
うで、その日の朝になつて、そつだ復習予習がしてなかつた
と気がついて、出かける間際に慌ててテキストに目を
通すことが日常のようになってしまいました。

でも一年間あつという間でしたが、やつただけのこと
はしつかり手ごたえとして有ります。だつて何も話せな
かつたんですものねえ。

よく友達から「中国へ旅行する目的で習っているの
ですか」と聞かれますが、私はその目的は全くないので
いつか旅行する機会があるかも知れませんが、唯々中国
語の美しさにひかれて習い始めただけの事です。もう
二、三年して片言でも色々話せるようになりましたら、
他分じつとしていないと思ひますが……。

今は自分の身近なところに会話を試してもらつて相手
がないのが残念です。

美しい言葉と美しい心で隣りの国中国の方々とも仲
良く出来る日がありますよう、これからも続けて努力し
たいと思つています。

英語講座

安田 淨

数年前のある日、何気なく見た文化協会の案内をきつ
かけに入会した小生が早や紹介文を書く側になりました。

当講座は第一・第三・第五土曜日の午前中に平城東公民館で開催されています。受講生は歳若い女性・気若い女性が主で男性は数人ですので、職場とは異なった素敵な雰囲気を楽しませて頂いております。

学習の進め方は、テキストの内容を先ずテープでヒアリングし、これを覚えて各人が順番に繰り返して発声します。しかし小生はうまく聞き取れない上に記憶も弱いので言葉がなかなか湧いて来ません。

こうしたとき、鎌田先生はヒントを示しつつ辛抱強く待つて下さいますので辛うじて行つておりますが、余分に時間のかかることに恐縮し、一方で親切に助言して下さいます仲間の皆さんの寛大さに甘えさせて頂いております。

中学レベルの初級とかなり難しい中級の二クラスになっていますが、ほぼ全員が連続して受講しますので、中間には疲れないように配慮された歌や旅行会話など楽しめる時間帯があります。この時は各人が近況を英語で話るのが原則ですが、日本語交じりで趣味や旅行談などあり、和気あいあいの楽しい一時となります。とりわけ久しぶりに顔を出される方の話題は、仕事・旅行・ボランティア



アや家族のことなど新鮮で、海外での体験など混じりとても刺激になります。

このようなことを重ねている間に少しづつ慣れ、最近ではこの日を楽しみにしております。

「始めるのに遅すぎる時(歳)はない」・「継続は力」と言われますが、まさしくその通りだと感じております。もう少し上達したら、東大寺周辺の観光客の案内を買って出るなどして友人を作り英語に慣れ、海外旅行を楽しみたいと考えています。

前号で西尾さんが紹介されました有志によるシンガポールとインドネシア旅行は実行されました。更には当地を案内された島田さんが帰国復帰され、長老の片桐さんはじめ旧新・老若多彩なメンバーで明るく楽しく、鎌田先生のご指導を受けております。人数に制限がありますが、入会ご希望の方は先生にお問い合わせさせていただきます。

学習風景の写真ですが、手前の方は写っておりません。

古代史講座

渡辺 馨

平成九年度の講座は、四月二十二日から始まって十年三月三十一日まで一月も休まず開催された。私はその初回がこの講座への最初の受講日で、いわば西も東もわからない新入生であった。当日は私のメモによると、鬼頭先生の他十名(男性四、女性六)の出席者で、初印象からアットホームな雰囲気を感じてほっとしたことを覚えている。

テキストは前年度に引き続き直木孝次郎他訳注の「續日本紀」をプリントしたものが配布され、元明天皇の和銅六年(七一三年)五月二十二日の項から始まり、養老二年(七一九年)九月八日の項で終わった。鬼頭先生は体調が回復されつつあるとはいえ、まだ十分ではないので、進行は広田好実さんが機関車役になって、適当に区切りながらテキストを読み、随時必要で参考になる注釈、説明等を加えたあと、各自から自由な質疑応答があり、熱いが楽しい論議の華を咲かせるという展開となるのが通例である。その時先生は絡まった勝手な論議を見守り

ながら、整理し、審判し、教示して下さるといいうわけである。

講座は年間を通じて毎回十一十五人の出席で行われるが、私を含めた二―三人の新顔を除いて皆さんは永年先生のもとで、古代史関係の古典を読解し、知識を集積されてこられたので、私は年齢では高い方だが、知識ではまるで落差がありすぎることを痛感させられた。そこでこれではなるまいと老に鞭打って、追いつけないまでも、その差を縮めようと五里霧中で予習、復習、参考文献・資料に目を通すことなど、学生時代を思い出しながら、次の回までを楽しみつつ過ごすようになった。これも先達の人々と打ち解けた雰囲気サークルであり、私のような門外漢の独断と偏見に満ちた意見を、寛容に受けとめて裁いてくださる先生や先達の見識の豊かさに負うものであると感じている。この一年間に読み進んだところは、ちょうど七一〇年に平城京に遷都して後の約一〇年間の、白鳳期から天平期に移行する、いわば奈良時代最盛期のプレリユード的な時期で、私個人にとってはいままでから最も関心があり、その歴史と文化を問いただし、味わいなおしたいと考えていた時期である。去る四月上

旬に再建された平城京の朱雀門が象徴するように、青丹よし奈良の都は「いま盛りなり」と歌われるような華やいた文物が光りあふれていたと思われるが、その陰には覆い隠せぬ庶民の貧困や僧侶と仏法の墮落などが満ち、社会的な不安を高めつつあったことが、この講座で確認することができたし、みんなの論議の的にも登場した。

この講座は今年度も新しい同志を組み入れながら、変わらぬ親交と研鑽を深めて行けるものと確信し、期待している。ついにはいつものテキストのプリント作成、整理その他いろいろのお世話くださる西島芳子さんはじめ何人かの先達に対して改めて感謝の辞を表させて戴くとともに、鬼頭先生の体調の更なる回復を祈らせて戴きたいと思えます。



押し花を楽しむ会

岡田 越子

心にやすらぎを与えてくれる草花。

花が大好きで押花をはじめました。お花屋さんにも並んでいる多種多色の花、お庭で咲いた花から、最近は道端にひっそりと咲いている小さな草花が気になり、その可憐な美しさ、可愛さに、一本の草にも心がなごみます。

美しい色や姿、数々の感動や思い出を、ハガキに小物に色紙や額に残しておきたくて、一枚一枚ていねいに乾燥させて作品づくりをしています。

小さな草花から、いちごや野菜果物、小鳥や人、風景へと創作も広がっています。

会員十七名、個性のある作品づくりを楽しんでいます。そしてまた、押しした花を分かち合ったりする和気あいの楽しい会です。

第一木曜日の十時から、三時三十分迄。午前中は押花の技法。続いて作品づくりに入ります。

今まで作った作品もずいぶん増えました。年賀状、まん

だら、色紙（大小）、額、小物では箸袋、コースター、マグネット、ミニ額、リース、雛、鯉のぼり、かぶと、ブローチなど。

興味のある方は、一度お出掛け下さい。お待ちしております。

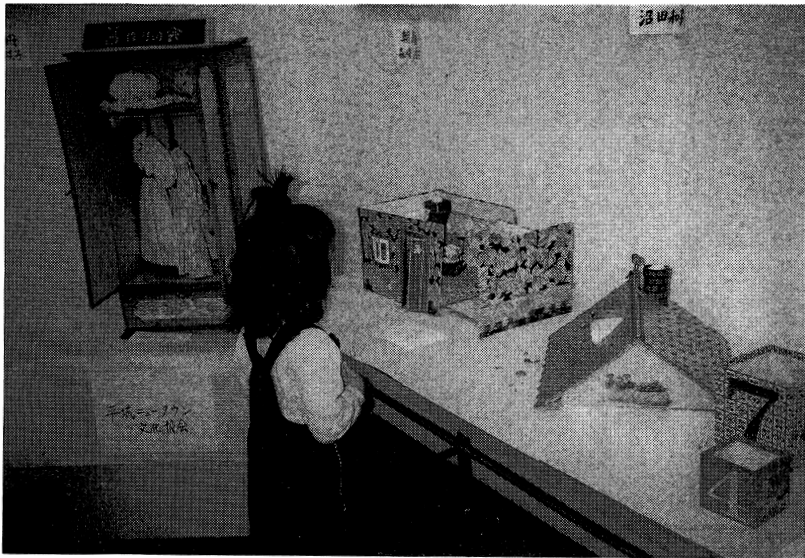
宮作りの会

中野 昭二

今年（平成十年）三月に、榎原文化会館で「民芸和紙はりえ展」を行うので、私達平城文化協会の宮作りの会も一緒に作品の展示をしませんかと、八木の「和紙はりえ・めぐみ会」からお誘いがあったので、私達宮作りの会でも皆さんの作品三十点ほど一緒に展示することになりました。後援団体には「奈良県文化協会連盟」「田原本町中央公民館」「明日香村豊浦老人会」「新崎紙商店」「平城ニュータウン文化協会」以上五団体が協力した開催でしたので、大勢の人達に観ていただき、私達の作品には色々の質問があって、それに答えるのに忙しい三日間でした。

「この作品は何で作っているのですか、素材は木ですか、この文様は手がきですか、どうして作るのですか、どんな作り方をするのですか、私にも作れますか、何日ぐらいで出来るのか」等々ありました。「これらの作品は全部紙で作っています」と答えると「こんなステキなものを作るのか」と感心し、「どこでこんな教室があるのか」「私も作ってみたい」という方が大勢いました。私達の作品が多くの人達にいろんな感心を示していただき、宮作りの会の皆さんも、これからの作品作りのよいエネルギーになる発表会でした。

今年「奈良県高齢者美術展」に作品を発表して行きたいと考えています。



囲碁同好会

中村 正雄

「余暇と定年」

今年に入るなり、大病を煩った。胃ガンのため三分の二を切除し、直腸ガンも同時に手術した。

二十数年前には心臓の手術も行っており、こちらも二回目の手術を近々実施する予定であった。

その矢先の病魔である。手術中に二回も心臓が停止するというトラブルに見舞われたがどうか手術は無事に終了した。

そのために、四十数年親しんできた酒も煙草も断った。それにしても最近の医学の進歩はすばらしい。少々の難病や、高齢者でも簡単に治してしまふ。

本年三月末には私も第二の人生も定年を迎え、フリーの身となった。

さて、これから何をすべきか、大病の結果体力の減退は著しい。またそれに伴い気力の低下も同時に襲って来る。

しかも残り時間はまだまだたっぷりある。

サラリーマンの場合、おおむね六十歳で定年になり、社会の第一線から退く。

しかし、その先にはまだ二十数年に及ぶ別の人生が残っている。その間、生きがいはい自分で見つけるとしても、何か気晴らしになる楽しみはないだろうか。

年を取ってから、「さて何が出来るのか」では遅い。やはり若い時分から養って来たものが初めてものをいう。

平城ニュータウン文化協会の講座及び同好会等はそれほどんども、趣味や教養に直結している。

この文化協会も十数年続いているので、継続して参加されている方はそれぞれの分野で、かなりの知識や技術を習得された人もかなりの数に達していると思われる。

私も同好会の一部である囲碁を担当しているが、もう何年になるだろうか。二十年近くの月日の経過をみるのではないだろうか。

期間の長いわりには、技術の上達は奇々として進まず、現状維持で進歩がみられない。

しかし、長い間打ち続けて来たため碁仲間も増えて碁仇も出来た。

「碁仇は、憎しも憎しも懐しき」

まさに、喜ばしい限りである。定年を迎え、毎日が日曜日という身分ともなれば、友人宅に出向いて対局し、又自宅に来訪を願っての囲碁三昧は何にもまして、老後の楽しみの一つになっている。

最近の新聞によれば、六十五歳以上の老人がついに、二、〇〇〇万人を越えたと報じている。

これから高齢者社会を迎えて、経済、福祉、医療と問題は山積しているが、健康で有意義な余暇の善用に努めて残りの人生を送りたいと思っている。

◎ 囲碁同好会の活動状況について

毎年春・秋と年二回行われている「奈良市公民館親睦囲碁大会」が今年も去る四月二十六日（日）に、奈良市中央公民館において開催された。

参加十四チームは市内の各公民館で囲碁活動をしているチーム同士によって行われる。

今までも優勝、準優勝を何度もし優秀な成績を収めてきましたが、今回も我が「平城西公民館チーム」が第十七回目の優勝を飾りました。

通常平城西公民館における我々の活動は、原則として第四日曜日を除く（他の会使用のため）その他の毎日曜日の午後一時から午後四時四十分頃までの間。例会の対局を行い碁を楽しんでおります。

その他行事としては

。毎年春・秋に行われる囲碁大会。

。昇段・昇級を目的とするリーグ戦の実施。

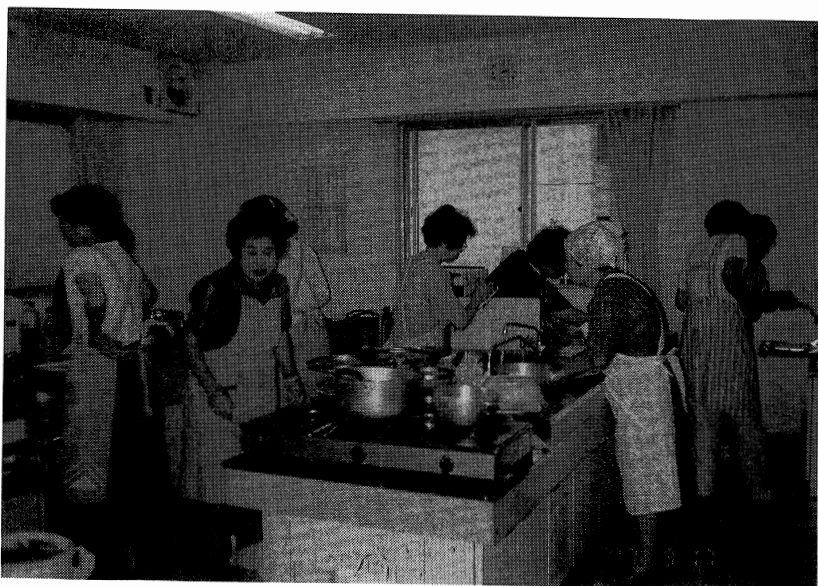
。プロ棋士、中嶋先生による隔月毎の指導碁等の実施を行っております。

皆様方のご参加を心よりお待ちしております。

料理を楽しむ会

松村せつ子

料理を楽しむ会が出来て丁度一年になりました。会が誕生するきっかけとなりましたのは、晩秋お亡くなりになった、読書会の講師をして下さっていた大橋先生が自宅療養中、メンバーは月一回先生のお宅に寄せていただいておりますがその時の会話からです。会が終る頃奥様はいつもお茶を用意して下さい、お茶やお菓子をいた



観月会 御馳走の準備

だきながらの雑談も又楽しい一時ひとときでした。その時奥様が外出先で「いちご大福」をいただき、とても美味しかったと先生に帰って話されると、甘党の先生は「是非一度食べてみたい」と言われたとの事。私が「いちご大福なら作れる」と言いますと、「じゃ、皆で作ってみよう」と話がまとまり、それなら月一回料理を作って楽しみたいという事になり、この会が誕生致しました。

それぞれ自分の得意な料理、珍しい料理を教え合っ
てというとても気楽な会です。

五月はいちご大福、六月は林さんの娘さん宅で採れた夏みかんで、マーマレードを教えてもらいました。やはり手作りのジャムはとても美味しかったです。八月は暑い時でもあり、涼しい所で美味しいものをいただくとうと貴船へ川床料理を食べに行きました。午前中涼しい時に鞍馬寺へ参詣し、暑い中汗をかきながら貴船まで下りました。そして、貴船川のせせらぎを聞きながら川風に吹かれての川床料理は最高でした。九月は文化協会の観月会と重なり、皆で観月会のお弁当作りをしました。

年が明けて三月は、山元さんの紹介で李さんといわれる中国の青年が本場の餃子を教えてくださいました。

李さんは「人に教えるのは初めてですが、皆さん自分のお母さんの様な人達ばかりで安心」と笑わせながら手際よく教えてくれます。李さんのお母さん直伝の餃子だそうで、小さい頃から見えて覚えてたとのこと。皮は強力粉をこねますので力がいらいます。手にひつつくと形が上手に出来ないと言はかり動いて手が動きません。それでも一時間もすると二百個余りの餃子の山が出来ました。早速茹でて、水ギョーザでいただきましたが、透明に茹で上った皮は歯ごたえがあり、中から肉汁がじわっと口にかけて、心をこめて作らないと今更ながら感じました。中国の人は男性でも自分の母の味をしっかり受けついでおられるのだなあと感心しました。

月一階皆なでワイワイガヤガヤ楽しみながら料理を作って食べています。これだけは誰にも負けない私の味とか、珍らしいから教えてあげたいと思われる料理が一つや二つ皆さんもお持ちと思います。是非教えていただきたいと思ひます。皆さんの参加お待ち致しております。

木目込人形・押絵同好会 陣内 満子

私がここ平城右京に引越してきたのは四年前の事です。「早くお友達をつくらなきゃ……」と思つていた時です、文化協会のニュースが配布されてきました。紙面を見るいろいろな講座が開かれており、「これだ！」と思ひ、この機に木目込人形・押絵同好会に入会させて頂きました。

入会した当初は、はにかんでいた私ですが、皆さんとても親切で優しく、一から手とり教えて下さり、すぐ解け込んでいきました。本当に有難く思いました。特に谷口先生は、みんなに分けへだてなく公平に接して下さい、気さくで楽しく明るいお人柄に触れ、月二回の教室が待ち遠しい今日この頃です。

秋の作品展にも何品か出展させて頂きました。

教室では皆さんがそれぞれ自分の作りたい物を心を込めて仕上げているのですが、手を動かし乍ら口も大いに動かします。その為に隣の教室に迷惑がかかっているかも知れませんが隣の教室は詩吟です。毎回きれいな声が

聞こえてきます。その中で人形製作に取り組んでいるのですから、なんと贅沢でリッチな気分なんでしょう。

出来上った作品は、お家に飾ったり、お祝いにあげたり、お孫さんにと、それぞれ思い思いの可愛いお人形を作る楽しさを味わっています。又、この教室は、十時から二時迄なのでお昼弁当の時間は、様々な体験や経験が話されたりで、とても人生の勉強もさせて頂いております。食事をほらばり乍らのお話がはずみます。これが又楽しいひと時です。

人形作りを通して、いい先輩やお友達にめぐり合った事は、何よりも嬉しく思っております。

今年二月には、五人の会員さんを迎え、増々賑やかにになりました。

どうぞ、一度覗いて見て下さい。

短歌を楽しむ会

中川都哉子

「短歌をたのしむ会」——どなたがつけて下さったか本当にいいネーミングです。

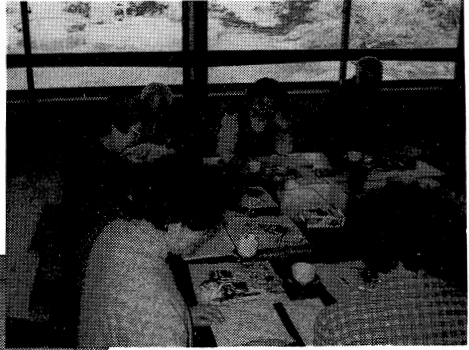
余分な気負いはなしで、素直に「短歌をたのしむ会」を月一回続けて気まして、この五月の時点で八十五回を数えました。

現在、特に先生はいらっしゃいませんが（網干先生がご多忙のため）、会員の中には長く作歌の勉強をして来られた方もおられますので、いろいろ教えられることもたくさんあります。

日常の事なきような風景の中にも、すくいあげれば一編の詩となる哀歓がありますし、年齢に相應しい遠い日の思い出も、あるいは変動する社会への思いなどなど、生きている限り作歌の素材は無限にあります。

それらを三十一文字に表現することは、当然「産みの苦しみ」もありますけれど、それだけに一首が誕生した時の喜び（いえいえ安堵感？）は別格です。

それぞれその人らしい個性あふれた短歌を持ち寄って



新年会（於：大乘院庭園文化館）

お互いに共感したり、人情の機微に触れたり、あるいはそんな視点もあつたかと、眼を開かれる思いを味わったり、時にはユーモアあふれる切り口に、思わず笑声をあげたり……。二時間余りは、あつという間に過ぎてゆきます。

これが文字通り「短歌をたのしむ会」の姿です。あなたも一緒に三十一文字の表現を楽しんでみませんか。

あ、そうそう、大切なことが後になってしまいました。が、年に一、二回はいつもの机の前から離れて遠出して（？）大いに詩情を喚起させる催しもやっていますよ。

古都奈良の歴史と自然——世界遺産にも指定されようとするそれらが、こんなに身近にすぐそこにあることの幸せ、そして地域の人々の文化的生活の大きな糧になっている「平城ニュータウン文化協会」の存在——それらに感謝して、シンボルともいえる「層富」のご発展を祈っております。

万葉講座

東郷 麗子

万葉集と私

私が万葉集を初めて知ったのは、遠い昔の小学五年生の時のことである。

ある日の国語の授業であったか、歴史の授業であったかはもう今となっては定かでないが、先生は教科書の内容からと思うが、和歌についての説明をされた。

「みんなは、詩についてはもう知っているね。この詩以外に日本には『和歌』というものがあります。別名『やまとうた』というのだけれど、字数三十一文字の中に、そう五字、七字、五字、七字、七字の五句を合せたこの三十一文字内に、自分が感じた嬉しいことや悲しいこと、目に写る景色の美しい様子などを詠みこむ、約束のある詩かな……があることを知って下さい」正確には短歌の説明であったが、そして「この和歌は大変古い時代から大勢の人々によって詠まれ、やがて奈良時代の中頃に、大伴家持という人によって四千五百余首も集められて歌

集になりました。その歌集は『万葉集』と書いて大変有名なものです」そして黒板に大きく『万葉集』と書き、いろいろの話しをされた後で「みんなも大きくなった時、これを読む機会があったらいいねー」と言われたのが印象的でした。今にして思えば先生は万葉集の愛好者であったのだろう。

その日のその後の授業は、みんなでこの和歌を作ってみようということになり、私も初めての挑戦に、指を折りつつ過日の遠足で行った多摩川の土手でのことを

土手の下腰をおろせば青草は

昨日の雨でぬれているなり

と詠んだところ、最初なのに素直に出来たとほめられた。小学生のなんとも稚拙な歌ではあるが、その時は精一杯のものであったのだろう。未だ綿々と覚えていく。

そして私は指を折りながら一つの発見をした。それはこの五字、七字の語句が大変調子よいように、初めての経験にしてはあらかたの言葉がこの五字、七字で丁度よく区切られ収まりのよいことである。それを何気なく先生に言う。「それは韻というものをふんでいるからだ、よく気が付いたね」と又ほめられ、ちょっと内心得意に

なったことを思い起こす。

『万葉集』だが小学生のその時の私には、少しもなじめないもの、難しいもの以外のなものでもなかった。

しかし、その後永い年月を経て、私はこの『万葉集』なるものが自分の身内でしっかりと根づいていたことをやがて知る。

間もなく太平洋戦争が始まり、戦争の拡大とともに勉強どころではなくなり、しまいに東京は連日連夜の空襲で命をも落しかねない日々が続いた。それでもようよう四年後、東京は居ながらにして富士山が見える焼土と化した。戦争は終わった。私の家も学校も焼け、すべてが混沌としてあえぐような毎日であったことが振り返えらる。

だが、年月とはやさしいもの、その確実な流れとともに町々は甦り、戦前以上の華やいた姿に変わっていった。

しかしまだまだ私の方は、『私の万葉集』には行きつかなかった。

それから又幾年かが経った。その間に私は結婚して子供も生まれた。

そしてである、その子供達が多少大きくなった時のあ

る日、上の子を小学校へ、下の子を幼稚園に送り出し、家事を大車輪で済ませてから鞆を横かかえにして、私は家を飛び出してバスに乗った。そして駅前（東京三鷹駅）の銀行の会議室に並べられた端の方の席に腰を掛けている自分を見出したのである。

永い永い年月の末にやっと行きついた、万葉集と直接に向かい会った日であった。が、この日の二時間余の講座で、一体何を勉強したかなどは全く覚えていない。だが私は小学生のあの時、先生が「皆も大きくなって万葉集を読む機会があるといいねー」と言ったあの言葉に、返事が出来たような気持ちになったことは覚えている。

私がかこ京都の端ずれ（奈良市には五分程で行ける）の木津町に来たのは、一昨年の夏、十九回目の引越しの末にである。夫の転動やその他の理由であったが、引越しもこうも度重なると、私は殻の家を背負って移動するでんでん虫を見て、うらやましく思わず苦笑したものだ。無論その先々で万葉集の勉強会を見つけたことが大変な時もあった。だから木津町への転居については、望んで来たのであるから引越しのわずらわしさなどなんのその「奈良に行ける」と私は奈良に転居するような気持ちになっ

ていたのだからおかしい。その上「やっと行きつく処に行けるのだ」との思いがあった。

それまでの私、一年に二度位、多い時は四、五度も奈良に来ていた。奈良は、私に臆面もなく、私の万葉集、私の古代史、^と言つてはばからない程に、関わり深くなつていたし、又それこそ私に永い年月をかけて育ませてくれた憧憬の地にもなつていたのである。

私は万葉集を未だ全部読んでゐるわけではないが、これまで読んだ歌々をみなそれぞれによいと思う。そして目読ではなく中程度の声を出して繰返し読むと、これ又実にいい。

そしてその中からあえて特定の歌人や歌を選び出すなら、私は土の香り、海の香り、生活の匂いのするはるばるとした東歌を、又人間愛に根ざされた歌々を詠んだ山上憶良の歌、人物に肯定的な感情を抱く。そしてもう一人、大伴家持の歌が好きである。家持の人物像についても、歌を通して大いに興味を感じられずにはいられない。家持の、他とは違ふ歌風は、時代が下つて来たためなのか、それとも彼の持前の資質によるものなのか――。

ともかく古代から続いた武門の名家、大伴氏の棟領と

しての家持は、藤原氏の台頭により止むなく数々の事件に連座して己の家が斜陽化していく現実の中で、もろもろの歌を哀感こめて独詠的に歌つてゐる。

私はかつてそこに歴然とした^かたち^ががあつたものが、今はあとかたもなく、ただ風のみが吹き渡つて行くといつたような跡に立つと、名状しがたい感動を覚える。そしてそれは想像力をいやがうえにもかき立てていくのである。

高岡の越中国府跡に立つた時も、この感動があつた。

私は家持に思いを吹きかえらせて次々と歌を詠ませた。

春の苑くれなゐにはふ桃の花

した照る道に出でたつ嬌嬌 四一三九

春まけて物がなしきにさ夜更けて

羽ぶき鳴く鳴誰が田にか住む 四一四一

もののふの八十をとめ等が汲み乱ふ

寺井の上の堅香子の花 四一四三

春の野に霞たなびきうらかなし

この夕かげにうぐひす鳴くも 四二九〇

わが屋戸のいささ群竹吹く風の

音のかそけきこの夕かも 四二九一

うらうらに照れる春日に雲雀あがり

情悲しも独しおもへば

四二九二

特に四二九二は春の日のけだるさの中での独詠で、私
が万葉集の歌の内が一番先に心引かれた歌である。

万葉集は家持の四五―一六番の歌で終る。そして又家持
自身も以後歌わぬ歌人となってしまったが、何故なのか
……。これも大伴氏の衰退と無関係ではなかったのだろ
うか……。

最後に、以上の東歌、山上憶良、大伴家持と三者を並
べて、一読者の私が特に好きな人物、好きな歌々と挙げ
るにしては、全く統一性に欠けるのではないかと思つて
しまし、これまでも時々考えることであつた。しかし
やっぱり最後には右のものばかりでなく、「万葉集はど
の歌も、どの歌も皆よい」と私の中で雑居しながら矛盾
がないのである。これはあえて言うなら、永々と四百余
年に渡つて上下の身分を問わず歌われた人々の、心の集
約、魂の集約が、即ち万葉集にはあるのだらうと――
だから何時の時代にあつても人々の心を打つ、万葉集の
万葉集たる所以がそこにあると思つてしまふのである。

俳句入門

西山佐代子

文化協会は昭和五十八年に発足いたしました。

「俳句入門」も早や十五年の歴史を歩んで参りました。
翌年の昭和五十九年に、「層富」第一号が発行されま
したが、當時を懐かしく拝見しています。

以来牧野春駒先生の熱心なる御指導を頂いております。

「層富」第一号 抜粋

松の雪籬の雪とつながれる

牧野春駒

萩の雨心散らさず針運ぶ

三井サチ子

再会を約して別れこぼれ萩

西山佐代子

胸うすき紙人形や花芙蓉

永谷秋乃

菊人形法被姿の腕かざす

永原寛子

薫風にみ佛在す集ひかな

柏木一枝

南大門極月の鹿かたまれる

喜多まき

夫の忌を修す手向けし菊白く

廣田 春

秋鯖や塩あらあらと打ちふりて

木村長子

木枯の中に缺の音しかと

川口シズエ

おんどりのとさかの赤し雪を掻く

森村和枝



平成10年1月 新年句会 平城●

チョコレートいびつに割れて梅固し 牧野和代

蟻の道たどれば海女の墓となる 牧野友美

すでに故人になられた方もありますが、今尚春駒先生をはじめ句友一同前向きに活躍し、嬉しい事でございます。只今、会員二十五名になります。春駒先生と共に月一回句会を催しています。年一回は吟行に場所を移して、句会をいたします。九年度は、押熊町の常光寺に参りました。丁度山椿に梅が見頃の静かなたたずまいでした。句会の後は、「ならやま集」として毎月先生がまとめてくださいますので、一年分を小冊子として楽しんでいきます。何げなく過しておりました日々も、悲しい時、嬉しい時思ったままに、又見たままに、五七五にまとめていきます。なかなか情緒のある句は出来ませんが、○印を頂くと、とても嬉しいものです。私共の町は幸に縁に囲まれています。真赤に燃える南京櫓、水木の花通り桜の公園や、睡蓮の咲く公園と季語は沢山あります。古都奈良の町も数々の行事があります。お山焼にはじまり、お水取や花会式、うちわまき等おんまつりで終りになります。しかし、ひっそりと佇む御陵端の犬ふぐり、柿やみかんの実る頃御陵への吟行も又楽しい事です。

今年一年間の中、春駒先生に添削して頂いた句を選んで見ました。

涅槃西風楽人住むと掲げある
原句

涅槃西風楽人長屋てふ札に

紙籬の細く目を引き紅をはく
原句

紙籬の目を細く引き紅をはく

思ひ切りかりこまれたる梨の花
原句

思ひ切りかりこまれつつ梨咲きぬ

草の名を正して供ふ花御堂
原句

草の名をたしかめて暮く花御堂

百合活けし土間ひんやりと家を辞す
原句

家を辞す土間ひんやりと百合活けし

父母の忌は遠くなる盆の月
原句

父母の忌は遠くなりゆく盆の月

冬の雲流れぬままの大玻璃戸
原句

冬の雲流れとまりし大玻璃戸

まだまだ言葉の足りない俳句ですが、これからも身の廻りを観つめて行きたいと思っています。

春駒先生、句友の皆様よろしくお願いたします。そして、俳句をのぞいて見ようかなと思っておられる方、



平成10年3月 押熊吟行 常光寺

是非、御入会ください。歓迎いたします。

今、手元に古びた習作の短冊があります。私の母方の祖父が知人に差し上げた様です。

来年は小便可さき炬燵かな 百貫

大正十五年の年号が遺されていますが、すでに昭和十四年八十二才で亡くなり、今では知る人もありません。

平成七年一月の阪神大震災は、ただ驚き悲しい出来事でした。海外滞在中の娘一家も、町並と共に家を失いました、町の復興も、又心身共に癒えぬまま三年経ってしまいました。災害地の健全なる復興を祈るばかりです。

その年の「ホトトギス」十二月号は、次の三句が巻頭であったと伺っております。

布団より枕があはれ瓦礫の中 後藤比奈夫

古雛に地震のさはりの一つならず 後藤比奈夫

けふ家を毀ちて春を行かしむと 後藤比奈夫

又私の存じております俳人の方にも次の作があります。

冴返る瓦礫となりて燻りて 塩谷康子

蝶凍てて被災電話のつながらず 中村美智

この下に断層走る雪間かな 木村定生

若布干す余震の続く浜にして 込山山歩

震源の島に赴任や爐を開く 伊藤ミネ子

初午の地震に遣えし町なれば 島田刀根夫

大地震の身替り雛となりしかな 西山佐代子

被災された数多くの人々の中には、俳句があることによつて、強いショックからより早く立直れた方々は数知れずあったのでないでしょうか。又俳句を作る事により記録を残すと共に心の寄り所にしたたいと願っています。



牧野春駒

最近四年間お願いしてきたグループ活動報告の前半を今年は幹事の西山佐代子さんにお願いした。佐代子さんという方は、この講座だけではなく、文化協会としてもかけがえのない方で、組織部長というべき役割を果たして下さっている。俳句入門講座については、さすがに幹事さんだけあって、いうべきことは殆ど触れて頂いているので、私の方は逆に、私ことを少し書かせて頂く。それは、春駒という変わった俳号の由来である。

昭和十六年の新春、私は亡父に連れられて、父の属し

ていた俳誌、京鹿子の主宰者の鈴鹿野風呂先生のお宅へ年始に伺ったが、その時私が始めようとしていた俳句の俳号をつけて下さるようお願いした。先生は即座に

新しき世紀よ君よ春の駒 野風呂

という俳句を作られ、春駒」という号を下さり、「はるこま」にしますか、しゅんく」にしますか」とおっしゃった。その年は丁度皇紀二千六百一年にあたり、床の間にご長女の結婚祝いに贈られた、玩具の春駒の嵌め込みのついた羽子板が飾ってあったのである。まだ十六歳であった私はあまりよい号とは思えなかったが、しゅんく」にして頂いた。その七年後に高浜虚子選の「ホトトギス」の巻頭に

夏潮に海女はみどりとなり沈む

他一句を載せて頂く光栄に浴したが、京都 牧野春駒」とあったので、「祇園の芸者さんかな」という人もあったようだが、今ではかえって愛着をもっている。ちなみに「ホトトギス」は昭和三十四年虚子先生の逝去とともに句作そのものをやめ、平成二年に漸く復帰し、平成四年にまた巻頭にして頂いたが、その時もまた「芸者さんかな」という人があった由である。

閑話休題。この一年間は一昨年の危機を越えた身体にしては、障害をもちつつも比較的元気に句会や添削と機関紙「ならやま」の発行ができた。この七月に、五年前出版した「平成山二」に続く合同句集「平成山三」を出す予定である。二十八名の作品千二百五十句程度を載せた、B6版約二百二十ページに及ぶものになりそうである。

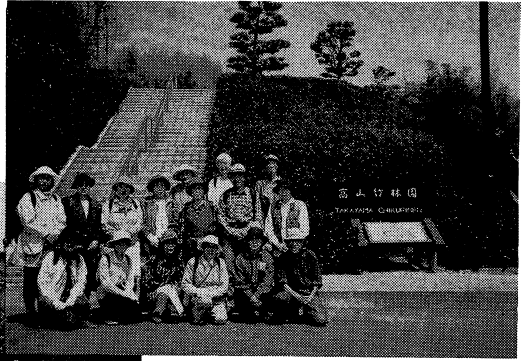
「……歩く会」

廣田 省吾

平城ニュータウン文化協会の講座・同好会一覧表の、十八番目にある「……歩く会」。この「……歩く会」の「……」が、本当に上手につけたもんだと、歩く度に思うのです。この意味ありげな「……」。思わせぶりです、それでいて、掴みどころの無い、又、都合の良いように解釈もできる愉快な、面白い「……」です。

平成九年度は、皆様と次のように歩きました。

四月二十日（日）晴 生駒高山方面（茶筌の里）



98・4・20
生駒 高山竹林園前にて



98・5・16
竹林前にて（2回目）

近鉄富雄下車。バスで高山へ。

高山で茶筥造りを奨励したと云われる高山氏（鷹山氏）が築いたと云う高山城。城址は奈良で最北端にある城址である。農家の庭先を通らせていただいて高山城址に登る。城山の上は荒れたままであった。

城山を降りて竹林公園資料館で、茶筥の出来上がる工程を見学する。

昼食後、高山八幡宮、法楽寺、真弓寺へ歩く。十七名

五月十六日（金）曇り時々晴 生駒高山の二回目
今日も、木の葉に埋もれて見えない石段を、一步一步
確かめながら高山城址へ登った後、竹林公園で昼食。此
の日は、茶筥師の谷村丹後宅で茶筥の出来上がる工程の
実演と説明を聴く。ミンナは、余りの手際良さに、黙っ
たまま見入っていた。

後は、前回と同じ。

十名

六月十五日（日）曇り時々小雨

三重県名張市赤目四十八滝

近鉄赤目口駅下車。バスにて赤目滝迄、約十分。



98・6・15
赤目四十八滝



98・7・18
赤目四十八滝（2回目）

したたるような新緑の下、上流の滝迄、上り道あり、岩の階段ありで、思い思いのペースで人が現れて来る。その現れ方が面白い。岩の角からと思っただら、今度は木の陰から。そして、現れたと思っただらスッと後へ消えるのである。それは、アツと言う間の事である。

滝——ソリヤ、すごい。《見応えあり》です。豪快な滝あり、優雅な滝あり、可愛い滝あり、目を楽ませながら歩きました。途中百畳岩と言われる場所で昼食。その頃から、ぼつり、ぼつり、雨が降りだしましたが、歩くには差し支えなく、上へ、上へ、奥へ、奥へと探検する人もいて、皆さん元気に完歩。十七名

七月十八日（金）晴 赤目四十八滝の二回目
暑い陽射しの中、綺麗な滝の流れと、爽やかな音で、涼感を満喫しながら目の醒めるような美しい《緑》に濡れて歩く途中、ヘリコプターが材木運搬中に墜落したと言う現場を通り、手向けられている花束が痛々しく目に入りました。十名

八月は、お休み。



98・9・19

当尾の里 浄瑠璃寺三重塔前にて



98・10・19

当尾の里 浄瑠璃寺から岩船寺に
至る石仏の道の途中の石段にて

九月十九日（金）晴 京都府加茂町 当尾の里
平城ニュータウンのごく近く加茂の当尾の里。浄瑠璃
寺から岩船寺までを歩きました。

浄瑠璃寺では、和尚さんが仏様の御姿の意味と浄土思
想を、誰もが解るように説明して下さるのを聞き、ひど
く感銘を受けました。

浄瑠璃寺から岩船寺までは有名な石仏の道で、右を向
いたり、左を向いたり、ワイワイ、ガヤガヤ。いつもの
通り、今日もおしゃべりに《華》が咲いていた。

昔はこんな人里離れた田舎の地に、こんな立派な寺を
建立するなど、人々の信仰が深かったのか、又、何の救
いを、このような仏様に求めようとしてお縋りしたので
あろうか——などと思いつながら歩いていると、道端の小
さな草にも、何かがありそうに思われてきて不思議であっ
た。

途中、村の鎮守様の石段で昼食。

岩船寺では、和尚さんからお寺の建立の《謂れ》をお
聞きして、帰りのバス停へ急ぐ。 二十名

十月十九日（日）晴 当尾の里の二回目 二十一名



98・3・22
 生駒一分方面（2回目）
 竹林寺再建された御堂の前にて



98・11・21
 生駒一分方面
 竹林寺境内行基の墓の前にて

十一月二十一日（金）晴 生駒一分方面

近鉄生駒線 一分駅下車

駅から西北へ歩いて十分位に、生駒大社（「往馬」とも書く）がある。如何にもこの地方の氏神さまらしい風格のある神社である。生駒大社から南へ、住宅地を通り抜けた岡の上に、行基墓と竹林寺がある。

竹林寺は、本堂が美しく再建されて輝いていました。村落を歩く途中、小公園で昼食。

円福寺では、和尚さんの「まず、拝みなさいや、拝みなさいや」に、思わず合掌。

住宅街の中の美努岡満墓（みぬかおかまろ）を見て、このような騒がしい所で、ゆっくりお休みになる事が出来るだろうか、と心配したりする。

今日は、皆さんにとり、やや物足りないような距離だったかも知れない。

十名

平成十年三月二十二日（金）晴時々雨

生駒一分方面の二回目

竹林寺は前回来た時より、寺の境内も建物も整備されていて綺麗になっていました。つい最近落慶法要が営ま

れたとか、あいにくと雨になって来たので、庫裡を管理されている村の方に頼んで、庫裡で昼食をとらしてもらおう。庫裡も新築したばかりであって、どうやら私たちが庫裡の使用第一号により、新しい畳の香に包まれて食事が出来たのも、よい思い出になりました。十九名

平成九年度も、幸い、無事に歩くことができました。これも、ご参加くださった皆さんのお陰と感謝しております。

平成十年度も張り切って歩きましょう。どんな出会いがあるでしょうか。

※お願い、どこを歩くのに、良いところがあれば、お知らせ下さい。

園芸の会

北村 孫衛

今の世の中、とびきり嬉しいことがあります。

園芸ブーム、ガーデニングであります。今や庭先、路

地裏通りを問わず、花の種類のこと、色彩の豊かなこと、他の国と比較しても、決してヒケをとらないだろうと思われまます。

バイオに代表される品種改良と、ハウスの出現による、周年栽培など栽培技術の向上や、規制緩和による海外の花の登場などに加えて、今の日本は不景気のドン底。これらが花作りにはすべて追風となつて、まるで神風の如くに吹いているのであります。

この神風に一番目の輝いているのが若いお母さん達ですね。勉強々々で追われた青春を送つたであろうから心臓の鼓動と同じリズムの花作りの楽しさを、人生の友にして欲しいなあと思ひます。

そして、土いじりは子供と一緒にして欲しい。我々日本人は、農耕民族なのだから、やはり遣伝子にもやさしいのがよろしい。花は仏の化身とも仏が宿るとも言われましたが、心の平穩はこれからの世の中でも、やはり一番大切な生活感覚だろうと思ひます。

高い山があつて、周りがぐるりと海、緯度もほとんど四季の変化も豊か、季節の花を楽しみ乍ら、五感を磨く。花作りの最もうれしいことのうちであります。

人生長生きをして折にふれて感動新た。自然の営みの持つ神秘が目の前、その一枝を切取って、活けてみる切花として新しい生命をここに見出してほしい。この生命に対してありがとう。花を活けてありがとう。勿論、育てている間も折に触れて花に言葉をかけ乍ら手入をして欲しい。花に耳は無くとも空気の震動が意心となって伝心します。更に良い事は自分の声を脳がキャッチして、活性化即ち、老化の防止につながります。

人は夫々天から授かった寿命があります。植物も一年限りのもの（一年草）、多年にわたるものなど多様ですが、私達人間が介在（育てる）することによる、枯死と言う不慮の天災（水のやり忘れなど管理不十分）があります。

植物は枯れるからと尻込みせず、次にはいい花を咲かせようと、植物と向き合ってはほしい。

花を育てるひとときも、人生の貴重な一コマであります。それだけに美しい花を見たい。その願いに手を差しのべ、情報の交換の場として園芸の会も活動を重ねていきます。

先日ヨーロッパを旅しましたが、庭先、路地裏を問わ

ずヨーロッパのどの国も、わがニッポンの方が花が豊か
であります。

豊かな花に囲まれて、話題の盡きないわが園芸の会
あります。

フランス語講座

片桐 一夫

フランス語講座教室で皆さんに会ったとき私はよく、
ボンジュール、メスイユ、ダム、オジュールジュイ、
イルフェボウ、コマンタレヴ等、まづは天気のことや体
調のこと等、フランス語で挨拶して、これからヒアリン
グが初まるのだと、自分に言い聞かせて緊張します。

ヒアリングの下手な私は、そのとき相手からの発音は
単音か、連結音だったか、また何の動詞活用だったか等、
特に長い記事のヒアリングの場合は、概要さえ把握でき
ないことがありますので、語彙が豊富でヒアリングの上
手な先輩の様に早くになりたいと、いつも思ふのです。

ヒアリングでなく、仏文記事を翻訳するときは、単語
を辞書で調べるのが出来、連結音についてはエリズイ

ヨンは、アポストロフで分かれますし、リエゾンやアンシェヌマンは、文字を追いつ読みすれば分かりますので、記事を見ながらの翻訳は私は好きです。記事が少々長くても余り苦になりません。

構文や会話に必要な色々な文法は、今までの学習で沢山教えてもらいましたので、是をベースにして私は色々な構文や会話を練習したいと思っております。

また有名な格言や歌も覚えたいのですが、これらには特別の文法があるかも知れませんが、此の様なことは先生によくお訊ねしたいと思います。今の私には是らのことは前途遠遠のことですが、此の願望が湧いてきたのも先生から今までに教えて戴いた学習が芽生えたのであると思ふと、先生の御恩を本当に有難く感ずる次第です。

今の段階では名詞、動詞その他の品詞の語彙を沢山覚えること、エリズィヨン等の連結音に馴れること、色々な話法に適合した動詞活用も、今まで以上に勉強しなければなりません。このことは能く自覚してゐるのですが何分にも老残晩学で、効果が上がらないのが残念です。

フランス語講座のグループ便りとして、以上私のことを記しましたが、先生はじめ教室の皆様方はフランス、

ドイツ、イタリア、スイス、イギリスなどの歐洲、アメリカ、カナダ等に旅行されて、英語やフランス語で現地の人と会話され、これらの旅行により国際的な見聞の広さを持つてゐられます。先生はじめ、此の様な方々に接して、旅行先の色々なお話しを承るのも楽しく、是が私のフランス語の勉強への励ましともなっております。

絵画の会

吉澤 幸江

絵画の会へのお誘い

梶野先生と絵画の会の皆さんの仲間入りをして、私も四年が過ぎました。この会の雰囲気は「層富」の中で何回も言われてきましたが、毎週火曜日の二時間が、あつという間に過ぎてしまふ楽しい時間です。初めてのの方は、私もかつてはそうでしたが、絵を描くということよりも、うまく仲間入りが出来るといふ心配があつて、少々おとなしすぎるくらいです。絵を描きながらのおしゃべりは、今、どこそこの花がきれいに咲いているとか、旅



行先で良い風景に出会ったとか、昔、こんなことがあったとかのんびりと話しがはずみです。でも入会して間もない方は、そんな話の中に、なかなか口をはさむ事が出来ません。しかし、話しを聞きながら状況を想像することとは出来ます。頭の中で話の内容を想像すること、このことが絵を描く上で大切なことなのです。梶野先生が日頃おっしゃる事ですが、絵は絵空事、想像の世界だと教えて下さいます。写生をすることということも結局はありのまま正確に描くということではなく、また正確に描けるものでもなく、そこに自分なりの自由な空想を入れることによつて、より正確なイメージでの写生が出来あがるということのようです。

人の話の状況を想像しながら聞くことによつて、自分ならどうしているかという事も考えられるようになります。良い絵とは、まずは他人が自分の絵を観て、うまく描けているなと思われることよりも、自分の想像がどれ程出せたかという事が大切なようです。結果として他人をも感動させることが出来るということでしょうか。

先生は、技術をとということよりも、精一杯の想像をするようにと教えて下さいます。そこに自由な遊びがある

ことが少し分かってきました。物事の状況を想像出来ること、これが絵を描く第一歩というわけです。

想像するというのは限りがありません。ある物を、丸くも四角にも、また硬くも柔らかくも描きわけてみるおもしろさ、これが絵を描くということでしょう。型にとらわれない自由な遊びの好きな方はぜひ入会をお勧め致します。

写真同好会

赤坐 右一

写真同好会も、文化協会の定期の会として、お引き受けしてから早や数年になりました。参加してくださる方々も徐々に増えて、大層喜んでおります。

『モシモシ同好会に入りたいのですが、何も解らない者ですが、コンパクトカメラでも、構いませんか』

こんなやり取りからいろいろお話させて頂き、仲間の輪が広がって来ています。

いろんなところへ出掛け、初心者からベテランの方迄和氣藹々と、写真を楽しんでおります。

お互いのでき上がりを、褒めたりけなしたり批評しながら、次のステップにと頑張っていますので、皆様のご参加を心待ちにしております。

山歩きの会

井筒 勉

NHKで、一九九五年七月から九月にかけて放映された「中高年のための登山学」にみられるように、最近中高年の間で登山への関心が高まっています。登山用品店へ立ち寄ってもお客の半分以上が中高年の人々が占め、その中でも女性の比率が高いことに気づかれることと思います。

中高年の人々の登山への関心の高まりがここ数年の兆しのような感じもいたしますが、一九八〇年に山と溪谷社から「中年からの山歩き入門」一九八二年に同じ山と溪谷社から「中高年向きの山一〇〇コース」(関西編)が出版されているのをみると、中高年の人々の登山に対する関心の高まりは二〇年以上前から静かに拡がっていたようです。

山歩きの良さは雄大な自然とのふれあいができる最高の場であるとともに、「歩く」という誰にでもできる日常の動作が人々に参加しやすい条件を作っているのではないのでしょうか。

勿論、山歩きにはこれ以外に経済的に負担が少ない、行程の中で仲間とのふれあい等々魅力になることは沢山あります。

特に中高年になって何か運動を始めようと思っても、野球、サッカー、テニスのように激しい運動量が必要とするものはそれなりの準備を必要としますが、山歩きは毎日お世話になっている二本の足を使って自分のペースで歩くことができ、その上対象とする山は自分の体力によって決めることができるのですから、中高年の人々にとって格好の運動といえます。

さて私達の「山歩きの会」は、十二年前に結成されてから毎月一回の例会を欠かさず続けています。

会員の平均年齢は五〇歳代になり、中から高へさしかかった人、既に高に入った人達が集まっています。

毎月の第二土曜日の例会では高の原駅に集合したときから、「健康」「料理」「仕事の状況」はては「経済の

見通し」に至るまで種々の話題に花が咲き、交流の輪ができます。

目的の山に入ると風、草木の匂い、鳥の声、足下の踏みしめる土の感触は日常の生活では感じることができない素晴らしいです。

頂上をめざして時には息をきらしながら何故こんなしんどい思いをして登るのかと自問自答するときもありますが、頂上に達したときの爽快感が全てのしんどさや、日頃の嫌なこと等を忘れさせてくれます。

山中には日頃目にしない木や花も多く、私達が植物博士と呼んでいる女性会員から花の名、木の名前を教えていただき自然の鑑賞と併せて植物の勉強や古道を歩く時は歴史の勉強もします。

登る山は近畿の山を中心として、新緑、紅葉、花、雪景色等を求めて季節に応じ決めています。一昨年からは一回日本アルプスも加えバラエティに富んだ山行ぎです。

この十一年間近県の多くの山を登ってきましたが同じ山に数度登っても、山はその時の季節や気候に応じた様々な姿で迎入れてくれます。

「山の会」が結成されて十二年が経ち、結成当時三〇

歳台、四〇歳台の方々も四〇代、五〇代に入りましたが、山のふれあいかたも「早く登り、早く頂上に達する」から「山の懐に入り、山をじっくり味わう」に変わってきただようです。

これからも今までの経験を生かしながら楽しく、安全な山の会を続けていこうと会員一同心に誓っています。

手踊り同好会

毛利 公子

手踊り同好会も、文化協会のお仲間に入れていただいて、丸四年を迎えようとしています。

最近では、新しい曲の稽古をしながら、以前にあがっている曲のおさらいをするので、三曲、四曲同時進行です。個人的に好みも違いますので、好きな曲には力が入るようです。三年越しでおさらいしているものもあり、本当にぼちぼち、楽しみ乍らの稽古です。

平城ニュータウン街開き二十五周年夏祭りには、会員で参加させていただきました。月一回、手踊りでボランティア訪問している老人ホームの夏祭や、朱雀連合自治



会の夏祭りにも、皆で参加し、踊らにゃ損々と良い汗をかかせていただきました。私事ですが、昨年六月に、日本舞踊飛鳥流より、「飛鳥華蓉」という名前をいただきました。一年たって、やっと「かようさん」と呼ばれても返事できるようになりました。やさしいひびきの「かよう」、名前に恥じないよう、増々勉強して、誰でもやさしく入れる日本舞踊を広めていきたいと思っています。夏には、盆踊りの練習もします。踊りに興味のある方は、一度右京集会所の稽古場のぞいてみてください。

銅板レリーフ同好会

丸福 修

私達の銅板レリーフ同好会が発足しましたのは、昨年の二月に開いた紹介講習会が始まりました。

銅板レリーフは厚さ0.1%という極く薄い銅板に釘や、箸、ヘラなどを使って凹凸を付けてレリーフにします。銅板は薄い上に焼鈍しという熱処理をしてありますので極めて軟らかく、新聞紙やスポンジ板を下敷にして上面が釘や箸で押しますと、簡単に膨らみます。又、逆に凹

ましたい時は裏返しして押しますと、表面から見た場合に凹んだ状態になります。初めの頃はその裏表の切替えが混乱して良く失敗をしましたが、失敗しても意外と簡単に修復出来ますので余り気にする事は無いのです。一番の難問は着色です。これは出来た作品を良く磨いてムトハツプという入浴剤に浸けて着色します。この着色は磨き方、浸す時間、液のまぜ方などで様々に変化しますので仲々思う様に着色出来ないのが、未だに私達の悩みの種です。

さて、レリーフの図柄ですが、本来は自分のオリジナルな図柄が望ましいのですが、余り絵心の無い私達には一寸手が届き難いので、今私達は写真や新聞雑誌などから適当な図柄を引張り出したり、コピー機を利用して図柄を組合せたりと、いろいろと工夫を重ねて絵心の不足をカバーしながら結構楽しんでいきます。

さて出来上った作品はそのままでも額縁にいれますと一寸した額飾りになりますし、メンバーの中にはお皿に貼付けて飾皿にしたり、不用になった焼物の木箱に貼付して再活用したり、木板に貼付してドア飾りを作ったりと、いろいろと工夫しています。これからもどんな活用

の仕方が出て来るのか楽しみです。

当然ですが、こんな楽しみ方は市販のものを買っていったのでは自分の創意が生かし切れません。そこで私達は額縁は勿論、いろんなものを自分達の中で作る手造り主義をモットーにしています。でも何様素人のことですので作り方は勿論、いろんな事が良く解りません。でもお互の知恵と経験を出し合いながらワイワイ、ガヤガヤとやっているうちに何とか様になるものが出来上って来るのが不思議です。そんな訳で集会所の会議室は、この時間だけは銅板レリーフ製造工場に早変わりします。

銅板レリーフはほとんど道具らしいものは使いません。極く普通に家庭にあるものが中心です。方法も簡単です。始めに少しガンバツて要領を憶えて頂ければ後は自分の工夫次第でいろいろに展開出来ます。結構面白く楽しめるのではと思っています。メンバーの方々も今では自分の好みの図柄を自作の額縁で、創意工夫しながら楽しんで居られます。新しく入って来られても、皆さんが手取り足取りで教えて呉れます。一寸おこがましいのですが、この銅板レリーフは何処のカルチャーセンターでも文化教室でも教えていません。恐らく私達だけではないでしょ

うか。誰にでも簡単に出来ますので一度覗いてみませんか。

狂歌

大田蜀山人

ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる

後徳大寺のありあけの顔

山里は冬ぞさびしさまさりける

やはり市中はにぎやかでよい

大江山いく野のみちの遠ければ

酒呑童子のいびき聞こえず

第十五回文化祭記録



展示の部

◎前期 十月二十五日～二十七日
 絵画 梶野 哲 青木 光子 石川 和子
 石崎 路子 大野 貞男 岡本 幸子
 込山 嘉代 小西 淑彦 沢田 実子
 島川 正行 白松 春子 高橋ゆかり

◆銅板
 レリーフ 丸福 修 石崎 路子 岡本 幸子
 山崎 明 山田 晴美 吉澤 幸江
 堀池 光合 広田 省吾 丸福 修
 出口真喜子 南村 勝次 西村 通弘
 黒田 節 込山 博介 込山 嘉代
 南村 勝次 西村 通弘 広崎 光子

◆木彫 井ノ山一雄
 山内 梅乃

◎中期 十月二十八日～三十日
 短歌 荒居 智子 宇野木久代 大浦小枝子

岡田 越子
沢田 実子
山崎たみ子
柴田八重子
喜田 まさ
中野 昭三
岡田 越子
柴田 静枝
若原 和子
打田 照子
幸路 喜代
山内 梅乃
日本酒ラベル
北村 孫衛

栢木 英一
玉置 小代
松村せつ子
大谷 桑子
山内 梅乃
赤井美津子
北村 源子
新司 輝江
榑原千鶴子
榑原千鶴子
山元 陽子
周藤 智子

片桐 一男
藤原 香
森田 陽子
柏木 一枝
榑原千鶴子
幸路 喜代
杉山 啓子

福井としみ
牧野 和代
和田美代子
黒田 節子
込山 博介
白松 春子
高橋 友示
土井 正子
西尾 弘子
平田 忠子
堀池 光合
赤坐 右一
鈴木 昭弘
谷口 直子
島田 守恵
陣内 満子
広崎 光子
河島美代子
鈴木 幸子
西山佐代子
松村せつ子

藤澤 陽子
三井サチ子
森田 陽子
宇野木久代
黒田 忠勝
鈴木 玲子
高橋はる江
中村 弓子
西島 芳子
廣田 省吾
山田 正子
北側 勝
藤本 和子
網千佐和子
西岡 智子
鷺塚 順子
榑原千鶴子
木村 絢子
高橋 笑子
南村 照栄
若原 和子

堀池 敏子
北本 敏子
澤田 実子
宗徳 郁雄
竹本 千鶴
南村 勝次
西山佐代子
藤原 香
渡辺 亮斗
志智 英子
沼尻 浩
石森千代子
東山 幹子

岡田 越子
伊藤 柳紅
木村 長子
大浦小枝子
込山 山歩
辻田しま代
西山佐代子

岡 良子
坂本よしゑ
南村 照栄

◎後 期
句 期

◆俳 句
◆ちぎり絵
◆宮作りの会
◆地 酒
◆園 芸
◆木目込み
◆写 真
◆拓 本
◆押 花



上演の部

◎ 十一月三日(祝) 北部出張所会議室

◆ 箏曲 「菊の花」 菊仲 米秋作曲 鈴木 清高作歌

菊地 雅千絵 北良 尚美 古閑 弘美

「飛躍」 久本 玄智作曲

田頭 雅千香 林 千鶴

「木陰」 松本 雅夫作曲

菊地 雅千絵 田頭 雅千香

◆ 詩吟 詩吟の会

「楠公詠詞」 藤田 東湖作

花田 清美 杉田 英二 周藤 吉雄

野口 照子 津崎美津子 中西 廸子

陣内 満子 岩井 静栄

「近江八景」 大江 敬香作

吉田 輝子 花田 克子 越智 伸子

中川 君子 細川 昭子 山道 慶子

「新相馬」

吉本 音市

◆ギター演奏

フラメンコギター独奏

高井登貴男

情熱のフラメンコ曲数曲

中村 昭三ギタートリオ

「黒い瞳」 ロシア民謡

中村 昭三

「宵待草」 多 忠亮作曲

村上 和子

「さくら幻想曲」 日本古謡

渡辺 純子

カールマント、ギターアンサンブル

「アルハンブラの想い出」

タレルガ

「スペインの花」

スペイン曲

高井登貴男 中村 昭三

村上 和子

足立 昌浩 井上 繁雄

増田 隆

渡辺 純子

◆舞踊 手踊り同好会

「さくら禿」

林 育子

「祇園小唄」

西村 信子

「北国夜曲」

島川恵美子

「青柳」

小森美恵子

「まりと殿様」毛利 公子

林 育子

西村 信子 島川恵美子

小森美恵子



1998年度（平成10年度）

第16回平城ニュータウン文化協会総会

日 時 1998年5月24日〔日〕
受付 PM1:00
開会 PM1:30
場 所 北部出張所会議室

- I 開会の辞
- II 会長挨拶
- III 来賓祝辞
- IV 議長選出
- V 議 事

- (1) 1997年度事業報告
- (2) 1997年度会計報告・監査報告
- (3) 1998年度事業計画
- (4) 1998年度予算
- (5) その他

- VI 閉会の辞

第16回総会 記念講演 午後2:30から

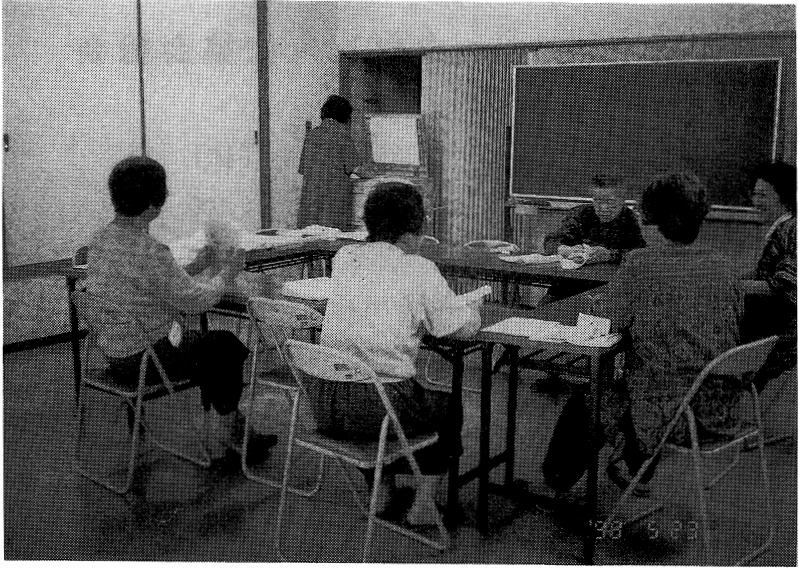
『キトラ古墳と高松塚古墳の壁画』

講師 関西大学名誉教授

網 干 善 教 氏

懇 談 会

午後4:00から



1997年度事業報告

- 1997年4月1日 ニュース1号発行
5日 常任理事会
12日 春の大和路見学 現地説明 網干 善教先生
都塚古墳・多武峰コース
- 5月10日 協会報発行 全戸配布
31日 第15回(1997年度)総会
記念講演「世界遺産について」
奈良市企画部長 南田 昭典氏
- 6月1日 ニュース2号発行
15日 25周年右京夏祭り実行委員会出席
7月6日 25周年右京夏祭り実行委員会出席
13日 25周年右京夏祭り実行委員会出席
29日 常任理事会
- 8月1日 ニュース3号発行
2日 25周年右京夏祭り参加
3日 25周年右京夏祭り参加
- 9月17日 観月の会
28日 右京小学校運動会出席
- 10月1日 ニュース4号発行
3日 文化祭展示の部打ち合わせ会議
15日 協会報発行 全戸配布
- 10月25日～11月2日 文化祭開催
25日～27日 前期展示の部 絵画、銅版レリーフ
28日～30日 中期展示の部 短歌、パッチワーク
宮作りの会、ちぎり絵
地酒の会、園芸
31日～11月2日 後期展示の部 拓本、俳句、押し花、園芸
写真、押し絵・木目込み人形
- 11月3日 記念講演「学研都市の現状と未来」
住宅都市整備公団関西支社学術研究都市整備局 局長 清宮 邦典氏
- 11月3日 上演の部
詩吟、舞踊、箏曲、ギター独奏
- 9日 囲碁大会
ごくろうさん会
28日 「ちぎり絵」(干支) 講師 柴田八重子先生
30日 「新春を祝い会」の打ち合わせ会議
- 12月15日 「新春を祝い会」の打ち合わせ会議
- 1998年1月1日 ニュース5号発行
11日 第15回「NT新春を祝い会」参加
21日 「層富」14号発行
2月1日 ニュース6号発行
3月26日 常任理事会

1997年(平成9年)度決算報告

平成9年4月1日～平成10年3月31日

【収入の部】

(単位:円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	384,879	384,879	0	
会 費	540,000	511,200	△ 28,800	@1,500×339+2,700
後 援 費	100,000	100,000	0	各自治連合会、自治会
寄 付 金	10,000	20,000	10,000	講師お礼戻り
雑 収 入	5,121	3,629	△ 1,492	銀行利息
合 計	1,040,000	1,019,708	△ 20,292	

【支出の部】

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	100,000	65,500	△ 34,500	文化祭、セミナー
助 成 金	69,000	78,000	9,000	講座、同好会
会 議 費	20,000	5,408	△ 14,592	会議、資料、他
広 報 費	500,000	402,300	△ 97,700	会誌、会報、ニュース
事 務 費	30,000	4,607	△ 25,393	事務用品、他
印刷、消耗費	100,000	100,000	0	コピー機購入補助
通 信 費	15,000	2,330	△ 12,670	郵送料
渉 外 費	30,000	18,750	△ 11,250	協賛費、祝金等
雑 費	60,000	15,249	△ 44,751	項目にない出費
予 備 費	16,000	9,250	△ 6,750	コピー機購入補助
積 立 金	100,000	100,000	0	コピー機購入
小 計	1,040,000	801,394	△238,606	
次期繰越金		218,314		
合 計	1,040,000	1,019,708	△238,606	

特別会計

積立金合計303,308円(平成6・7・8年度)9年6月2日にコピー機購入のため解約

1997年度の会計帳簿その他会計関書類を精査しましたところ正確であることを認めます。

1998年3月31日 監 事 渡 邊 亮 斗 (印)

監 事 西 村 美 佐 子 (印)

1998年(平成10年)度予算

【収入の部】

(単位：円)

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	218,314	
会 費	525,000	@1500×350人
後 援 費	100,000	各自治連合会、自治会より
寄 付 金	10,000	
雑 収 入	6,686	銀行利息他
合 計	860,000	

【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事 業 費	100,000	文化祭、セミナー他
助 成 金	81,000	講座、同好会の助成 @3000×27
会 議 費	10,000	会議、資料、他
広 報 費	450,000	会誌、会報、ニュース他
事 務 費	7,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通 信 費	5,000	郵送料、電話代
渉 外 費	20,000	協賛費等
雑 費	20,000	各項目に該当しない必要経費
予 備 費	17,000	
積 立 金	70,000	コピー機積立費
合 計	860,000	

講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予 定 会 場
1	歴史教養講座	網 千 善 教	6 5 1 0	第2火曜日 (10時～12時)	北部出張所会議室
2	古代史講座	鬼 頭 清 明 問合せ 西島 芳子	2 9 9 7 72-0335	概ね第4火曜日 (14時～16時)	〃
3	囲碁同好会	中 村 正 雄	0 1 0 6	毎日曜日 (13時～18時)	平城西公民館和室
4	木目込人形・押絵同好会	谷 口 直 子 問合せ 石森千代子	3 1 8 3	第1・3水曜日 (10時～14時)	北部出張所会議室
5	読 書 会	問合せ 山内 梅乃	1 6 5 4	第4金曜日 (10時～12時)	〃
6	中国語講座	松 村 如 洋	9 6 0 5		
7	詩 吟 の 会	吉 本 音 一 西 尾 弘 子	5 0 3 6	第1・2・3水曜日 (13時～16時) 問合せ 花田 清美 (71-2787)	〃
8	地酒を味わう会	中 村 正 雄	0 1 0 6	第2土曜日 (18時半～)	会 場 不 定
9	園 芸 の 会	北 村 孫 衛	0 8 2 3	第4月曜日 (13時～16時)	右京4-7-5
10	拓本を楽しむ会	込 山 博 介	5 0 5 8	毎月1回日時・場所はその都度会 員に連絡	
11	絵 画 の 会	梶 野 哲	3 2 9 5	第1・3・4・5火曜日 (10時～12時) 第2火曜日 (14時～17時)	北部出張所会議室
12	俳 句 入 門 (平城山句会)	牧 野 自 然 問合せ 西山佐代子	1 7 7 1 4 9 5 0	第3木曜日 (13時～16時)	平城西公民館
13	短歌を楽しむ会	網 千 善 教 問合せ 木庭 和子	6 5 1 0 3 4 9 4	第3火曜日 (13時半～16時)	北部出張所会議室
14	フランス語講座	高 橋 節 子	8 2 5 3	毎月曜日 (10時～11時半)	〃
15	山歩きの会	西 幹 友 雄	6 1 0 2	第2土曜日 (雨天中止の場合は第3土曜)	野 外
16	英 語 講 座	鎌 田 時 栄	3 1 5 0	第1・3土曜日 (9時半～12時)	平城東公民館
17	万 葉 講 座	松 岡 禮 一	2 9 6 4	第1月曜日 (13時半～15時半)	北部出張所会議室
18	… … 歩 く 会	広 田 省 吾	0 2 0 7	奇数月第3金曜日 偶数月第3日曜日	野 外
19	宮 作 り の 会	中 野 昭 三	3 2 5 8	第2・4月曜日 (10時～16時)	北部出張所会議室
20	野草をしらべる会	前 川 良 雄 問合せ 柏木 一枝	0 6 8 2 3 2 0 2	春・夏・秋年に3回程度	野 外
21	パッチワーク研究会	打 田 照 子 問合せ 山元 洋子	2 8 7 9	第2・4金曜日 (13時～16時)	北部出張所会議室
22	手踊り同好会	毛 利 公 子	1 9 8 9	第1・3金曜日 (10時～12時)	右京集会所
23	写 真 同 好 会	赤 坐 右 一	0 1 1 1	概ね月1回土曜日、ニュースで通 報	野 外
24	銅版レリーフ同好会	九 副 修 問合せ 込山 博介	9 4 4 5 5 0 5 8	第1・3金曜日 (13時半～16時)	右京集会所
25	押し花同好会	廣 崎 光 子	0774-73- 0702	第1木曜日 (10時～15時)	北部出張所会議室26
26	料理を楽しむ会	松 村 せつ子	9 6 0 5	第1木曜日 (10時～12時)	平城東公民館
27	表 装 の 会	西 島 芳 子	72-0335	第2・4木曜日 (10時～17時)	北部出張所会議室
28	子どもの生活研究会	加 藤 育 生	5 2 2 3		

会 則

第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会と
いう。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに
会員相互間及び他の文化団体との連絡提携
の場となり、総合文化に関する進歩普及を
はかり、地域文化の発展に寄与することを
目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために、次の事業を
行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文
化講座等の開催。
- 2 関連文化団体との連携及び協力。
- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

第三章 会 員

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、
協会の目的に賛同する者とする。会員の種
別は次のとおりとする。

- 1 正会員 年間会費一、五〇〇円
但し、高校生五〇〇円

- 2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する
者で年間会費五、〇〇〇円以上納める
個人又は団体とする。

- 二、会員の更新手続きは不用とするが会費
は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但
し、二年間会費納入なき場合は退会と
見做す。

第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、
事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、

理事若干名、監事二名。

第七條

理事は、正会員中より選出する。

二、会長、副会長、常任理事は理事の互選

で定め總會の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中

より会長がこれを選任し、總會の承認を得る。

四、監事は会員中よりに二名選出する。

第八條

会長は協會を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故ある

時は代行する。

三、理事は理事会を組織し、協會に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務

遂行に当たるとともに、總會で決議し

た事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、

常任理事会等の決議に基づき全般の事

務連絡処理に当たる。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常總會に

おいて報告する。

第九條

顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は會議に出席して意見を述べることが出来る。

第十條

役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二、補欠より選出された役員は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行行。

第五章 會 議

第十一條

理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、

理事の三分の一以上から會議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならぬ。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名

する者とする。

三、理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができない。

4 その他理事会において必要と認められた事項。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数を

第六章 会 計

もって決し、可否同数のときは議長が

第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入に

決す。

よる。

第十二条

常任理事は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ

第十六条

会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第七章 会則の変更

第十三条

通常総会は毎年一回会長が招集する。

第十七条

この会則は、総会の議決を得なければ変更

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたと

することができない。

き会長が招集する。

第八章 補 則

三、総会の議長は総会出席者の中から指名

第十八条

この会則施行についての細則は、理事会の

する。

議決を得て別に定める。

四、総会の議事は、出席者の過半数をもつ

第十九条

この会則は昭和五十八年二月二十七日から

て決し可否同数のときは議長が決する。

適用する。

第十四条

次の事項は通常総会に提出して、その承認

を受けなければならない。

1 事業報告及び収支決算

2 会計監査報告

3 事業計画及び収支予算

一九九八年度

役員名簿

会長 網干善教

副会長 牧野自然

事務局長 松岡禮一

會計 光岡祐彦

監事 山内梅乃

参与 大浦小枝子

参与 西村美佐子

参与 東 觀

参与 川口勇

参与 谷口直子

参与 赤坐右一

参与 石森千代子

参与 上中敏央

参与 打田照子

参与 大迫くき枝

参与 岡田越子

参与 梶野哲

鎌田時栄

北村孫衛

鬼頭清明

木庭和子

込山博介

鈴木幸子

高橋節子

田中幸夫

玉置小代

中野昭三

中村正雄

南村勝次

西島芳子

西幹友雄

西山佐代子

花田清美

廣田省吾

廣崎光子

前川良雄

松村如洋

理事

理事

松村せつ子

丸福修

毛利公子

渡邊亮馨

渡邊亮斗

大井政子

大工美智子

寛 ゆり子

河村美智子

喜多正恵

北川尚子

澤田實子

柴田晃良

西岡智子

濱口光良

山下良吉

山田綾子

吉村惣五郎

組織分擔

『層宮』編集部

部長

広報部 部長

文化祭上演部 部長

文化祭展示部 部長

松岡禮一 木庭和子 西島芳子 梶野哲 山内梅乃 上中敏央 花田清美 鎌田時栄 北村孫衛 鈴木幸子 松村如洋 毛利公子 込山博介 石森千代子 打田照子 岡田越子 梶野哲 中野昭三 南村勝次 廣田省吾

行事部 部長

組織部 部長

配布委員

廣崎光子 前川良雄 牧野春駒 丸福修 東村正雄 中村友雄 西岡禮一 松岡佐代子 西山和子 木庭和子 神功地区 (南村勝次) 第一団地 北川尚子 一丁目 河村美知子 一丁目 ガーデンハイツ 藤澤陽子 二丁目 梅嶋貴美子 三丁目 木庭和子 高橋はる江 四丁目 酒井不二夫 五丁目 寛ゆり子 右京地区 (山内梅乃) 第二団地 野川タカ子 三丁目 飯田雅子 柏木一枝

四丁目

五丁目

右京地区

一丁目

二丁目

三丁目

四丁目

五丁目

第一住宅

第二住宅

六丁目

左京地区

下司まさ子 西岡智子 岡田越子 山田綾子 吉田篤史 西村美佐子 大浦小枝子 下村圭子 皆藤るみ子 中井美知子 大工美智子 岩井静栄 大井政子 橙井公栄 鈴木幸子 大井政子 福井和子 左京地区 (澤田實子) 一丁目 澤田實子 二丁目 喜多正恵 三丁目 黒田節子 四丁目 岡本幸子 駅東団地 大工美智子